
ヴェルデドラーードで牧場生活を

雨根

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヴェルデドーラードで牧場生活を

【Zコード】

Z3811Z

【作者名】

雨根

【あらすじ】

のほほん牧場オンライン『アクティブファーム』を満喫していた主人公。……って、いつの間にかリアル牧場に立つてマスヨ？ 原因も前後の記憶も状況もさっぱり。しかしどうやら腹は減る。なら仕方ない。悟った彼女はゲームの世界『ヴェルデドーラード』の自分の牧場で、持ちキャラ『リコリス』として、ヘタレで性格の悪い相棒と、リアルなんだかゲームなんだかよく分からぬ牧場生活を開始する。*ゲームの仕様に沿った牧場生活になります。本当にリアルで専門的な内容にはなりません。

第1話 いつぞ夢であれ

さやさやと気持ちのいい空氣の中、彼女はぽかんと口を開けた。

田の前には青々とした葉を揺らす、見渡す限りの作物郡。その向いつの牧草地では牛がモーと鳴いていた。他にも羊や馬なんかも見える。

…なんて長閑な。じわじわと自覚を迫る緊張感さえなければ、暢気に動物たちと戯れていただろうに。

ぐるっと見回し、畠と牧草地の周囲に点在するいくつかの木造の建物は、今いる位置からは中を窺いることはできなかつた。だがなんのための建物なのか、わざわざ確認しなくとも理解している。

今日の前にある風景だけでも、ここがどこなのか十分に確定できてしまつた。畠の広さ、牧草地とその向こうに流れる小川、建物の見た目と配置。見覚えがありすぎるほど見慣れた風景だから。

大きく深呼吸して、恐る恐る顔を後ろへ。肩越しに見えた、丸太で作られた小さな家。これまた見覚えがありすぎて困るソレは、他と同じ木造建築でありながら趣が違つ。当然といえば当然で、こちらは人が暮らすための家なのだ。

暮らす、といつても中にあるのは本当に最低限の設備で、キッチンとテーブル、イス、棚と小さなベッドだけ。本当は色々と増築したり、物を増やしたりもできたのだが、金と手間を惜しんでやらなかつた。

そう。やうなかつたのだ。他でもない、彼女自身が。

この家の決定権は全て彼女にある。家だけでなく、田の前に広がる畠も、牧草地も、動物たちも、全て。笑えない。だって、

「あはは。どう考へても私の牧場だよ……」

乾いた笑い声と青褪めた顔が、平和な牧場になんとも不似合いだった。

『アクティブファーム』といつオンラインゲームがある。

名前の通り牧場経営をベースに、RPGやらシミュレーションやら各種ミニゲームやら色々と詰め込んだゲームで、しかしクエストやイベントの発生条件、装備条件はほぼ全て牧場の発展に由来する。プレイヤーはヴェルデドーラードという世界で一人一牧場を与えられる。通常プレイヤーの牧場は世界MAPとは独立したエリアとされ、各町にあるワープポイントから入場する。もちろん他のプレイヤーの牧場に遊びに行くことも可能だった。冒険に繰り出すより、誰かの牧場でたむろしているプレイヤーの方が多かったかもしれない。

しかしアクティブファームは普通のMMOだった。

パソコンの前に座つて3D画面の中のキャラクターを、マウスとキーボードで操作する。間違つても頭にVRとか付いたりしてVR MMOとか、そんな夢の溢れるスタイルではなく、じくじく普通のMMOだったのだ。というかVR MMOなんてまだ誕生もしていない。それこそお話のこと。

それなのに。嗚呼、それなのに、だ。

今この有様つていつたいどういう訳だらう。自信を持つて自分の牧場だと断言できるこの場所に、彼女は立っている。……否、シヨツクと混乱のあまり地面に両手をついているので、立つとはいなけれど。

掌に触れる地面のざらざらした土の感触は本物で、視界に入つてくる髪は燃えるように赤かつた。

(あ、ヤバイ、なんか変な汗出てきた)

ガクガクと震える身体を叱咤して、顔を上げてみる。何気なく、すぐ目の前に植わっている苗に視線を置くと、ぺろん、と上に文字が出た。

「？！」

ぎょっとした。

現実そのものの植物の見た目に、あまりにも不釣合いな『デジタル文字。集中してみれば、

『

トマト

』

レベル：100
成長率：30%
状態：健康

』

これまた、彼女にとつては非常に馴染みのある文字情報だった。本来なら、農作物や動物にカーソルを合わせると、自動で表示されるものだ。

彼女は虚ろな目を周囲に巡らせた。先ほどは軽く眺めただけだった景色の一つ一つを少し長めに見つめてみる。

牛、羊、馬。名前、レベル、年齢、状態。家畜小屋。鶏小屋。水車。従来のゲーム通りの名称や説明を見てから、少し考える。正直ゲームと違つて操作方法はさっぱりだが、おそらくは。

「えーと……【ステータス】？」

ぱさっと紙が広げられるような、それでいてなんとなく機械的な音がして、目の前に何かが躍り出た。

「おお……出た」

田の前に現れたソレは、羊皮紙をかたどつた3Dグラフィックだつた。並んでいる文字は、書かれているように見えて、実は紙の表面に浮いている。

トマト情報の時にも思つたが、リアルそのものの視界に、半透明で触れない画面が共存しているのは不思議な感じだと、若干逃避している彼女の頭は思った。近未来を描いた作品などでは一般的だが、現代に生きていて実物を目にすることは多分ほとんどない。

羊皮紙には、こう書かれていた。

レベル：1000

牧場レベル：900

職業：妖精師

職業レベル・マスター
ブリースト

副業・神官

副業レベル・マスター

ボス名・妖精王
フュアワーロード

以下略……

『

ゲームのままのステータスを確認して、今も視界の端にちらつく赤い髪を摘まんで眺める。

クローズド 参加者特典、限定ヘアNO.8と呼ばれる髪型を真っ赤に設定して、その見た目からリコリスと名をつけた。ゲーム内でも名前の通つたキャラだった。間違いなく彼女がマウスとキーボードで動かしていたキャラだ。

そしてどうやら 今の、彼女自身であるらしい。

第2話 相棒がエンカウントしてきた！

リコリスは大きく息を吐いた。もう一度ゆっくりと吸って、吐いて。それから俯けていた顔を上げる。

「よし。考えても無駄だ」

わざわざ声に出したのは、自分に言い聞かせるためだった。
え？ 落ち着いてる？ 考えるのやめないと発狂しそうですがナ
二力？

頭の中によく分からぬ問答をしながら、リコリスは立ち上がった。膝についた砂をはたき落として、大きく伸びをして、また深呼吸。

とりあえず、家に入ろう。

色々と周囲を確認することに決め、彼女はまず生活の拠点となる
であろう『『血宅』』の扉を開けた。

「見事に何もないなあ……分かつてたけど

外見も内装も素朴な木造建築だ。むしろ内装は素朴すぎるという
か、質素といつか……むしろ貧乏なの？ といつ有様だ。本当に最
低限の設備しかない。そして狭い。

「まあ、貧乏は貧乏なんだけどね~」

独り言が癖になりそうと思う。だが喋っていないと頭が変にな
りそうなのだから、仕方がないではないか。

リコリスは狭い室内を横切つて、部屋の隅にある簡素な寝台に腰を下ろした。何故か落ち着くのは、多分気の迷いだ。

寝台横にあつたエンドテーブルの上に、鏡があつた。キャラクター及び牧場作成記念に与えられる、最低限の家具一式の中のひとつだ。

手にとつて、覗き込んだそこには、ある意味予想通り、ある意味予想外の姿だった。

特徴的な真っ赤な髪は艶々と見事なキューティクルで、病的ではなく化粧もしていないのに白い肌。髪と同じ色の長い睫に縁取られた大きな目は緑色で、髪によく映えている。

キャラ作成した本人だ。特徴など改めて確認するまでもない、はずだった、のに。

「なんだこの美少女……」

ゲームで見慣れたと思っていた顔は、本物になると全く違つて見えた。

要はキャラクターの特徴を丸ごと引き継いだ本物の人間なのだ。確かにゲームのキャラクターそのものの見た目であつたら、それはそれで不気味だが、逆にここまで美形にされると正直きつい。

そりや、美形は目の保養だし、美少女も大好きだ。リコリスだって、綺麗になりたいと思つたことくらいはある。

しかし、持つて生まれた美貌でなく、努力で掴んだ美しさでなく、こういう状況で眩いばかりの美少女になりました、というのはなんというか……居た堪れない。そう。居た堪れないのだ。分かつてもらえるだろうか。無理！

リコリスは力なくベッドに倒れこんだ。鏡は適当に枕元にポイ。ぼへつと天井を見るともなしに見て、考える。これからのこと。

こうなってしまった原因はもうひん気になるが、今のところ完璧なノーヒント状態で、どうしようもない。

それよりもまず、目先のこと。

精神的ダメージによるところが大きい疲労感に、時間の経過と共にじわじわ来ている空腹感。作り物ではない。

ゲームと現実の混ざり合ったような周囲に、リコリスが設定したキャラクターの見た目で、本来の彼女ではなくても、この身体は本物なのだ。

それは、死にたくないなら、生きていくことを考えるべきだということ。

幸い、ゲームでリコリスが所有していた牧場はそのままのようだ。作物情報が表示されてはいたが、見た感じ、あのトマトは食べられる。後で齧つてみよう。

「…………知ってる人とか、いないかな」

贅沢を言えばプレイヤー。同じようにこの意味の分からぬ状況にはまっている人がいてくれたなら。そこまで考えて、思い至る。

「そうだ。【フレンド】ー」

思わず大きく響いた声に応えて、羊皮紙が広がる。先ほどのステータスと似ているが、こちらはフレンドリスト。ゲーム中、ログイン状態の相手は名前の前に花がつくのだ。

だが、期待を込めて上から下まで眺めても、花を咲かせた名前はひとつもなかった。もしかしたらフレンドシステムが機能していないだけかもしれない。あるいは、フレンド登録していないプレイヤ

ーなら同じ世界にいるかも。

どちらにせよ連絡を取り合つ術はないが、全く希望を捨てる必要はない。リコ里斯は、必死に自分に言い聞かせる。

プレイヤーがダメなら、N P C はどうだろ？

ゲームの状態がどこまで反映されているか分からぬが、リコリスの記憶通りなら、彼女の牧場は一般的なプレイヤー牧場と違い、独立エリアではなく世界マップに存在している。そしてそこは、ひとつつの町のすぐ南の土地だった。つまり牧場を出て少し行けば、町があり、N P C 人がいることになる。

……いや、むしろいてくれないと困る。非常に困る。

知っている人がいないだけなら残念で済ますこともできるが、誰もいないのは大問題だ。遭難。無人島生活。いくらなんでも心が折れるわ。

(町に行つてみようか？ でも怖いな)

『じうじうとベッドの上を左右に転がつて、リコ里斯は悩んだ。状況が普通でないだけに、かなり怖い。

知っているN P C がいるだろうか。いたとして、相手はリコ里斯をどう認識しているだろう。

『アクティブファーム』には、牧場以外にもうひとつ大きな特徴がある。それはN P C の数と個性だ。

世界中に散つている彼らは、名前を持ち、個性があり、過去が設定されている。ついでに大量のクエストを発生させてくれるものだから、必然、プレイヤーたちと深く関わっているのだ。

リコ里斯からすると、近くの町『スイエル』の住人たち皆、名前も性格も知り尽くしたなじみの人々。だが、彼らが生身で生活し

ている現実に、いきなり入つていける自信がちょっとない。できたらもう少し、小規模な感じで、そつと様子を伺つてみる感じがベストなのだけれども。

「あ

ひとり。

ひとりだけ、頼つてもいいかもしないと思える人物がいる。

存在しているだらうか。リコリスのことを知つてゐるだらうか。相手はスイエルの町には住んでいない。牧場の近くの森の中に、小さな家を構えている。

こつそり様子を見にいくのはどうだらう。

いい考えに思えて、リコリスは勢いよく体を起こした。と、
ほぼ同時に。

扉が吹き飛んだ。

「……っ？！」

盛大な破壊音と衝撃に、小さな家がびりびりと振動する。ついでに鼓膜も心臓も揺れる揺れる。扉の破片がぱらぱらと足元まで転がつてくるが、驚きすぎて声も出ない。

音の原因は探すまでもなかつた。

視線の先、それまで扉があつたところに、男が立っていたから。

リコリスと同じ真っ赤な髪の男は、息を切らせて、切ないような思いつめたような顔をしていた。言葉にならない何かが、形のいい唇を震わせている。

これまた結構な美形だったが、それよりもその暗褐色の瞳から、彼女は視線が外せなかつた。音にならなかつた言葉の代わりとでもいうように、形容しがたい想いが暗い焰になつて揺らぐ。

見ているだけで、ざわざわと胸のうちが騒ぐようなそれを、リコリスは知つていた。実際に、实物として目にしたのは初めてでも。

「 ライカ」

零れ落ちたのは男の名前。正式にはライカリス・オルジエノヴァ。彼はこのゲームの、リコリスにとつて最も重要な、NPCだつた。そして、こつそり覗きにいこうとした相手。

向こうから訪ねてくれたはある意味好都合……な訳がない。無残な扉が、リコリスの顔を引き攣らせる。ただでさえ物の少ない家なのに、扉さえなくなるとかどうなの。

名を呼ばれたのをきつかけにして、固まつていたライカリスの表情が動いた。泣きそうな顔のまま、花が咲くような嬉しそうな笑みを浮かべる。それはもう、蟲惑的といつていよいほど艶めいて見えて、リコリスは思わず息を詰めた。

「リコ……ー」

叫ぶように呼ばれたりコリスが答える前に、視界が塞がれた。走り寄ってきた彼が、勢いもそのままに抱きついてきたのだ。すっぽりと抱きこまれて彼女は呻く。

「ぐええ」

力が強すぎる。何しろ、木の扉を弾き飛ばした腕力だ。

(……死ぬ死ぬ)

色気のない呻き声がリコリストの口から漏れたのに、抱きしめてくる腕は全く緩まない。仕方なく、腕を回して背中を叩いた。手加減はしなかった。

「痛つ 痛いですよ、リコさん」

「私も痛いし苦しい！ 圧死させる氣？！」

「久しぶりに会ったのにひどいです」

人を食つたような言葉遣いと久しぶり、の言葉にはたと氣づく。これは、状況はともかく、親しい友人との会話だ。

『アクティブファーム』のNPCには個々のプレイヤーに対して好感度が設定されていて、それはクエストやイベントなどで上下する。非常に非情にシビアな仕様だった。

好感度の上がり方はNPCそれぞれ違い、必要数値以上を稼ぐとパートナーとなる。狩りに同行してもらったり専用イベントがあり、特殊アイテムが貰えたりと恩恵は大きいが、パートナーはお互い1人だけ。

既に誰かのパートナー設定されたNPCでは、一定数値までは好感度を稼げない。また、パートナーを得たプレイヤーは、他のN

PJの好感度は同じく一定値まで。大体目安として、『親しい友人』止まりだ。

ちなみにパートナーとの関係は親友、恋人などのメジャーなものから、養子縁組、師弟、マニアックなものならパトロン、女王様と奴隸、飼い主とペット……など、様々に特別な関係がある。

田の前のライカリスは、好感度を上げにくいことと性格と口が悪いことで有名だった。一応リコリスのパートナーで、彼女の親友。ゲームで培つた関係がそのまま延長されているなら、少しだけ安心できる……か？ 痢がありすぎて若干不安な気もするけど。

しかし孤独からは開放された。今まで画面の中だった相手が目の前にいて、しかもやたら親しいという状態に慣れなければならぬが、ひとりぼっちよりはずつといい。

締め付けていた腕の力も弱まって、色々ほつとじつつ顔を上げたリコリスは、そこで目を丸くした。

「ちょ、な、なんで泣いてんの？！」

透明な雫がぱたぱた。顔を上げたりコリスの頬に落ちてくる。ライカリスは微笑んだまま泣いていた。困ったように、でも嬉しそうに。

「えええ、似合わなすぎるでしょ

「リコさんはひどすぎですよね」

「だって、あんたはもつといひ、ドライで意地悪で」

「……へえ」

対応に困つて憎まれ口が口をつけば、潤んだ暗褐色の瞳に不穏な輝きが宿る。涙を流したままなのに、危険な感じがした。

それを認めて、リコリスは納得した。彼女の知っている、そのままのライカリスだ。

指先で涙を拭つてやると、ライカリスはため息をついて、その手に顔をすり寄せた。

「……ずるい人だ」

甘えを多分に含んで零された言葉に、リコリスは笑った。実際に誰かとこんなに親密にすることなど初めてなのに、平然としている自分が、とても不思議だった。

しかも、今までのお付き合いはゲームのプレイヤーとNPC、それがなぜか生身で初対面したばかりという意味不明っぷり。なのにずっと一緒にいた親友同士のようなやり取りができるてしまうなんて。生きた人間として、大切な親友として、当たり前に受け入れつある自分の心の方に、リコリスは少し戸惑う。全然嫌じゃないし、複雑だ。

ライカリスの目尻に残っていた一滴を拭いながら、思わずまじまじと彼の顔を見つめる。

「あれ？」

扉吹き飛び事件と涙のインパクトのせいで気づくのが遅れたが、記憶にあるゲームの画像よりも、大分類がこけて見える。

リコリスとよく似た、でも彼女よりも少し暗めな赤い髪も、背の中ほどまであるそれを後ろで簡単に括っているのも、感情を強く映す印象的な瞳も記憶のまま、特徴を引き継いでいるのに。ただでさえ線が細かつたのに、それに輪をかけて、その上顔色まで悪いって。

リコリスは眉をひそめた。

「何か？」

ライカリスが薄く微笑んだまま訊ねてくる。涙はもう止まっていたが、その跡はまだ目元に残っていた。

「なんか痩せてない？」

「……………そうですか？」

妙な間があった。

怪訝な顔の頬を、指先でつついて、そのまま摘まむ。摘まむ肉があまりない。

「痩せたよね」

「いひやいれふ」

「つていうか、やつれた。ちゃんと食べてないの？」

これは気づかないフリができる範囲を超えている。心配くらい、させてもらう。

睨むリコリスの指を外させてから、ライカリスは肩を竦めた。

「死なずに動ける程度には食べますよ」

なんだ、その微妙な返事は。
ライカ、と促せば目を逸らされた。

「……………2日で1回は食べてます」

「少なつ」

痩せるはずだ。

リコリスは目を丸くして、それから盛大に顔を顰めた。

「ダメでしょ、それは！ 倒れたらどうするの？」

「倒れませんし、平氣ですよ」

答える声はため息まじりで、カチンとくる。

倒れてからでは遅いし、倒れてないから平氣というものでもないだろうに。

「ああ、そう。確かに、人の家の扉吹っ飛ばすくらいには元気みたいだけね～」

扉を壊されたことは別に怒つてない。腹が立つたのはそのことではない。

皮肉っぽく言つたりコリスにそっぽを向かれて、ライカリスは困った顔をする。

「怒らないで……リコ」

その、縋るみたいな声と顔は反則だと思つ。思うが、リコリスは腰に回つていた手を振り払つて立ち上がつた。

ライカリスはそれにひどく慌てた様子で彼女に手を伸ばした。

「い、行かないで」

私を置いていかないでください。そんなことを真つ青な顔で言つ。先ほどの涙といい、今の怯え方といい、何があつたらどうなるんだろう。

なんとなく不安になりながら、リコリスは伸ばされた手を掴んだ。

「置いてつたりしないわよ。あんたも来るの」

「え……」

「ライカリストが歩き出すと、手を引かれたライカリストは素直についてきた。ぽかんと口を開けたまま。

迷いなく向かった先は外。

見渡す限り青々としている野菜のうち、最初に見たトマトの前で立ち止まる。ツヤツヤで綺麗なトマトだ。

ライカリストは掴んでいた手を離し、田の前のトマトを一つちぎると、そのまま牧場の横を流れている川まで移動した。持っていたトマトをその水で簡単に洗い、片方を齧つてみる。

うん。食べられる。それも、すごく美味しい。

「はい」

黙つてついてきていた後ろの男に、もう片方のトマトを差し出す。差し出された方は、瞳に疑惑を浮かべていた。

「どうあえず食べて。トマト好きだよね？」

「ええと……はい」

「畑にあるもの、好きなのが好きなだけいっちゃって。まあ生野菜ばっかりもアレだから、後でご飯も作るけど」

だから、ちやんと食べて、と。伝わったかな。

(これでも心配じてるんだってば)

丸々としたトマトが、ライカリストの手に移る。口をつけるのを見つけて、ほつとした。

「美味しいです」

「うう。それはいいんだけど、」

ほつとしたのも束の間。

「……なんでまた泣きやつなの?」

え、トマト美味しいよね?

第3話 異世界初日でまさかの……

明るい夏の空の下、空氣の綺麗な森に囲まれた牧場はどこまでも長閑で。

それなのに川岸に並んで腰を下ろす2人の表情は硬い。

泣きそうになったライカリスを宥めて、リコリスは改めて彼から話を聞いていた。

「あなたたちが消えてから、この世界では2年が経っています」

2年前まではたくさんの牧場があり、管理する牧場主たちがいた。それがある日、突如として牧場主たちはいなくなり、彼らの牧場へのゲートは閉じて、リコリスのように世界マップに存在していた牧場は更地になつたといつ。

突然、全て消えたのだと。

そう聞かされて、彼女は息を詰めた。

プレイヤーたちがこの世界にいない。それは、つまり。

顔を強張らせたりコリスに、ライカリスは静かに頷いた。

「世界中が大混乱に陥りました」

「そう、でしょうね……」

リコリスはこの世界のあり方を知っている。ゲームで遊ぶにあたつて最初に目を通すストーリー、あるいはゲーム中で受ける説明で、故意に読み飛ばさなければ、目にする世界のルール。

この世界、ヴェルデドラードに生きる人々が日々得る食糧の約80%を、プレイヤーたちの牧場が担つてること。

都市と都市を結ぶ転移装置やを動かすのが、牧場で生み出される生命力であること。

ただのゲームなら、それはあくまでも設定だ。プレイヤーが減つたからといってNPCたちは食えたりしないし、転移装置も止まつたりしない。

しかし、今いるこの世界がゲームの世界と同じルールで動いている、本物であつたなら。生きた人々が暮らす実在するヴェルデドラードだったとしたら。

「……」

難しい顔で黙り込んだリコ里斯に、抑揚のない声でライカリスは語る。

「世界はあなたたちが動かしていました。だから、人々は必死で探しました。でも僅かな手がかりすらないまま

取り戻したいもの、取り戻そうとしたものの欠片すら掴めないまま、時は経つ。人々に残ったものは、彼らとの記憶と、直前に収穫されていた農作物だけ。

そして、当然ながらその作物も減つていいく。深刻な食糧危機を目前にして、人々は生活を優先しなくてはならなくなつた。牧場主たちを探す余裕などなくなつてしまつた。

今では他の都市のことはほとんど分からぬ。転移装置が止まつたのと同時に、都市同士の連絡回路まで閉じてしまつて、お互いの情報が手に入らないからだ。

更には、狩る者がいなくなつたことでモンスターまで増え始めて、隣町すら遠い。移動どころか、自衛で手一杯だという。

「…………」

(あ、頭痛くなってきた)

なんだその、最悪な状態は。

どう考へても、リコリスひとり戻つたからといって、改善される
規模ではない。

「スイエルの町はまだマシな方です。クローグさんの農場があつて、
海も森もあるので、他の都市より遙かに食料を得やすい。モンスター
も弱いですし。私などは身軽なので、もっと楽でしたね」

「町の周りのモンスター、狩つてくれたの？」

「ええ、まあ」

スイエルの町は、ゲームでプレイヤーが最初に降り立つ町だ。チ
ュートリアルの要素が強く、牧場について指南するためのNPC、
クローグ爺さんが小さな農場を経営していた。海と森の恵みも豊富
だ。田舎で娯楽の少ない町だつたが、今回はそれが幸いしたらしい。
しかもライカリスがいる。パートナーNPCはそのペアのプレイ
ヤーとレベルが揃えられるため、彼のレベルは1000のはず。ど
う考へても初期マップにいる強さではないので、彼が動いてくれて
いたならきっと大丈夫。

他の都市にもパートナーNPCは大勢いるが、そのどれだけが、
ライカリスのように町を守つてくれているだろう。

戦闘向けると全体の4分の1くらい。非戦闘NPCはパート
ナーであつてもレベルが存在せず戦えない。上位プレイヤーたちの
パートナーは軒並み性格に難ありで、他人のために動くとは思えな
かった。

リコリスは、彼女の仲間の廃人プレイヤーたちと、そのパートナ

ーを思い出してみる。

(……うん、無理)

「ぶつちやけた話、ライカリスがスイエルの町を守っていたというのが既に十分驚きだ。」

「町の人は全員無事ですよ。食べるものは多少減っているので節約はしているようですが、それ以外だと特に変わりはないはずです」

「スイエルの町はリコリスにとって大切な町だ。ライカリスに勝る存在こそいなが、住人たちは皆友達だから。」

「ありがとう」

心からの礼を述べたりコリスに、ライカリスは目を細める。

「いいえ。……あなたの大切な場所ですから」

「…………」

（すみません。すみません。失礼なこと考えてごめんなさい）

ゲームでのライカリスは人間嫌いで、他人に対してもの如しだつたが、これではリコリスの方がよほど人でなしだ。罪悪感で胸が痛い。

「リコさん？」

「……なんでもない。ホントにありがとうございました、ライカ。……ごめんね」「いいんですよ。多分、この人間嫌いが町を守ってるなんて驚きだ、とか思つていいんでしょうけど、謝らなくていいです。概ねその通

りなので

返す言葉も「やせこません。そして沈黙は肯定デス。バレバレですかそうですか。

ていうかそれ自分で言つちゃうつてどうなの？

引き攣つているリコ里斯の顔を覗き込んで、ライカリスはいたずらつぽく笑う。

「あなたのがなかつたら、わざわざ動きません。他人なんて生きてても死んでもどちらでもいいですからね」

はい。出ました人でなし発言。しかも超いい笑顔。
リコ里斯も笑い返す。

「よかつた、私の知つてるライカだ」

さらば罪悪感。

思い返せばゲーム初期、こんな毒まみれの発言ばかり投げつけられて、何度も心折れそうになつたことか。懐かしい。

「あなたのそういう素直なところ、好きですよ」

「私はライカの素直じやないとこも好きだな」

「……」

「ふ、照れるな」

リコ里斯が笑顔全開で言つてやれば、ライカリスが口元を押されて顔を背ける。その耳が赤いのを確認しつつ、彼女は追い討ちをかけた。

甘いぜ。こういうのは照れたほうが負けなんだ。

感じなくてもいい罪悪感に苦しめられた仕返しをしておいて、目

の前の赤い頬を撫でる。「ずるい」とかなんとか聞こえてきたが、スルーで。

「で？ こんなにやつれちゃってるのは、食糧難のせい？ 皆に食べ物分けてたとか」

でもライカリスは自分で狩りができるし、モンスターだつて構わず食べてしまうから、こんなに瘦せるのはおかしくないだろうか。

「ああ、いえ、それはまあ、そんなところです」

言い淀んで、結局言葉を濁した。

リコリスもそれ以上の追求はしなかった。彼の瞳をまた、あの苦しきなるような光がよぎったから。それに。

(　ごめんね。私にはそんな資格、ない)

全部話せと、言える立場はない。言つていないこと、言えないことが多すぎる。

リコリスは大きく息を吐く。それから、不安そうに彼女を伺つているライカリスの肩を軽く叩いた。

「じゃあ、これからはちゃんと食べてよね。私が帰ってきたからには、スイエルの町の食糧難も解決だし？」

「え、あ、はい」

返事をしたライカリスに微笑んで、立ち上がり、大きく伸びをした。

「さあて。これから働くぞー！」

「……無理はしないでくださいね
「倒れたら看病よろしく?」

ぱつりと言われた言葉には、遠まわしな返事で。と思つたら、視線がきつくなつた。

「 リコ」

あ、怖い。

「ライカにだけは怒られたくないなあ、そんなに瘦せて」

「リコー。」

怖いけど、過保護だね。

勢い込んで立ち上がつたライカラリストの切れ長な瞳が見下ろしていく。

内心ちよつとヒヤヒヤしながら、その視線を挑発的に見つめ返した。

「じゃあ、ひやんと生活する約束しなさい」

「リ

「しつかり食べて、危ない」とはしないで、もひとつ自分を労わりなさい。心配させないで

「あの」

「隠せつて言つてるんじゃないからね? ちょっとなら大丈夫とかでもないからね?」

リコ「リストの知らない2年間だけではない。ゲームであつた出来事も視野に入れて、問答無用で畳み掛ける。

そうだ。これはもう、ずっとずっとと言つてやりたかった。この男

は自分に無頓着すぎる。

クエストでは要望に従つて動くだけだつたし、そもそも会話ができるわけでもなかつたし。画面の中のキャラクターに怒つても仕方ないと思つていたが、ショッちゅう田の前で怪我をされるものだから、本当は悔しく悔しくて。

「うして田の前に生きている以上言つておかなければ。あんな調子で無茶をされたら、身がもたない。絶対胃がねじ切れる。いいチャンスだから、言えるだけ言つておこう。

「たいした怪我じゃないとか、ちょっとくらい怪我しても平氣だとか……私の方が平氣じゃないの」

「わ、分かりましたから」

「ホントに分かつた？ また繰り返すなら、私だつて色々やつちゃうよ？ ひつくり返るまで働いたり、敵の大群に単騎特攻とかしてやるんだから」

「やめてください…」

堪りかねて叫ぶように言つたライカリスの田を真つ直ぐに見る。

「だつたら。もつと自分を大事にするつて約束しなさい」

「約束、します。しますから」

「ん、よし。なら私も無茶はしない」

満足したり「リストが頷くと、大きなため息が返つてきた。

「……本当にやめてくださいね。妖精師で特攻なんて自殺行為以外の何ものでもない」

(せつやせうだ)

なんといっても、ライカリスはメインの職業に妖精師、副業に神官^{ブリースト}を選んでいる。

双方共に防御が非常に低く、その2つが合わさると文句なしに紙である。ペラッペラだ。レベルが上がつてもそれは変わらない。そしてその上、単体火力も最低だ。攻撃魔法なんて1つだけとう悲しい。

狩りをする時など、MPの多さと回復魔法に物を言わせての持久戦だ。しかも雑魚相手に。

(一人なら、ね)

「しないしない。ライカが約束守ってくれるならね。私の戦い方知つてるでしょ？」

「知つてますけど」

そう。極めてしまえば、妖精師には妖精師の戦い方ができる。その光景を思い出したのか、ライカリスが微妙な顔をした。本気のリコリストの戦い方は実に独特なのだ。

「とにかく、約束しましたから。あなたも無理はしないで」「うん、分かってる」

やつと少し安心できたのか、ライカリスは表情を緩めた。

「さ、戻つてご飯にしよう」

町の方も気になるけど、そこまで深刻な状況でないなら、ライカリスに食べさせるのが先だ。

その後は畠でありつたけの作物を収穫して町に向かおうか。

(いや、でも。ライカこの顔色だし……休ませたいなあ)

町に行くといつたら絶対ついてきやうだ。優先すべきは

「リコさん」

「うん?」

色々考えていたら、後ろから静かな呼びかけがあつて、腕を掴まれていた。リコ里斯は足を止めて振り返える。

「もう、どこにも行かないでくださいね。私の隣に……いて、ください」

約束を求める声だった。

咄嗟に答えることができず、リコ里斯は沈黙する。

答えるの? 答えていいの? 答えられるの?

確かに、強く願うほど戻りたいと思つているわけではない。戻りたい理由がない。

困ったことに、目の前の相棒の近くになら、いてもいいかもしないと、思い始めてもいる。

でも。それでも。

何が原因で、どういった理由でここに来てしまったのか、分から

ない。

それは、いつまた、この世界から湧えるか分からないということだ。

ライカリスを置いて。

(この人を置いて?)

腕を掴む大きな手が震えていることに気づいて、リコリストは唇を噛んだ。

「ライカ。私は牧場主たちが消えた理由が分からぬ」

「そんなの、私にだつて……」

「そうだよね。だから、おたいつ同じことが起きるか分からぬ、と思う」

「 」

ライカの顔が歪む。歯を噛みしめて、きつく眉を寄せゐる。決壊は目前で。

掴まれた腕が痛い。感情が高ぶると、本当に手加減できないようだ。

「ずっとここにいるつて、はつきりと断言はできない」

「……そんなの、嫌です」

「分かつてゐる。だから……だからね、私の意志だけでいいなら。約束、するよ」

まさかの異世界初日で、永住の決断を迫られるとは思つていなかつたけど。

我ながらなんて単純で流されやすい、とも思つけれども。正直、相手が悪かつた。勝てない。

「もし選択の余地があるなら、迷わずライカを選ぶから。許されるなら、ずっとライカのところにいるから。それだけは、約束」

「 はい」

伏せた瞳から、一滴、ぽろりと落ちた。

そんなライカリスの長い前髪をかき上げて、リコリスは顔を覗き込む。

「……やーい、泣き虫」

「なつ」

「と」ひるでそろそろ腕放して。折れる

「と」ひるでそろそろ腕放して。折れる

長袖だから見えないけど、悲くらいできていそうだ。

途端に慌て出すライカリスを眺めながら、リコリスは決めた。

「ひなつたら意地でもここに残る方法を、あるいは確証を探しだす。

探して、必ず掴んでやるわ。

第4話 巨大蝙蝠ヒトマトパスタ

「何を作らうかな~」

小さなキッチンを前に、リコリスは腕まくりをした。
ちなみに袖を捲くつた左腕には手の跡がくつきり。犯人は後ろで
無意味にうろうろしている。

確か調理台の下の棚に、器具一式が入っているはずだ。
家と家具はケチつたり「ロリスだが、調理器具はレア品を大量に揃
えていた。

『アクティブファーム』には「鍛冶」「革細工」「裁縫」「木工」「
鍊金」「料理」の6つの生産スキルがあり、この中から2つを選
んで伸ばすことができる。

リコリスが選んだのは裁縫と料理。故に調理器具にもレシピにも
不自由しない。廃人らしく、集められるだけ集めてある。

リコリスはしゃがんで木製の戸に手をかけた。
何も考えずに両開きのそれを開いて、

「…………」

パタン。

閉じた。

棚の中にはあったのは 否、棚の中は異空間だった。

棚の中は夜だった。見たこともない大きな満月が浮かんでいる。

その満月を背景にして、おどろおどろしい城が建ち、その周囲を無数の蝙蝠が飛んでいて、リコリスはその光景を見下ろしたのだ。棚はそんな謎の巨大異空間の上空に口を開けており、田舎での調理器具は、その前方を漂っていた。

何事だ。

「リコさん？ 何かありましたか？」

「な、なんでもない。何を作ろうつかと思つただけ」

不思議そうに訊いてきたライカリスに、力なく首を振った。自分の家の棚に驚いているなんて、突っ込まれたら言い訳できない。リコリスはずつとこの家に住んでいたことになつていてるのだから。

それに実は、心当たりがある。

ゲーム中では、棚を開くとマスが並んでおり、アイテムアイコンを自分の持ち物から移動させて収めるシステムになつていた。おそらく、大抵のゲームでそうなつてているだらう。

ただ、このゲームではその棚画面の背景画像を設定できるようになつていた。

リコリスがこのキッチン棚の背景に設定していたのが、ハロウインイベントで配布された画像だった。大きな満月に、歪な城のシルエット、飛び交う蝙蝠……。

(そのせいいかーつ)

謎は解けた。だがあえて言いたい。

何故こうなつたし。

「何を作るんです？」

「ん~。トマトのパスタとかどうかなあ」

レシピを所有しているはずだ。

冷蔵庫の中に入っていたアイテムを思い出してしながら、リコリスは答える。食材は全てその中だ。

そちらにも色々入っていたはずだが……棚がこの様子だと、冷蔵庫の中もカオスな気がしてならない。

覚悟を決めて、もう一度棚を空ける。皿の前に浮いている器具の中からお皿当てを探しつつ、内心で少し焦る。この棚、使い方が分からぬ。

「ええと、麺を茹でるから【寸胴】でしょ」

言葉になると、アイテムに反応したのか、すすす、皿の中のひとつが近寄ってきた。

寸胴だ。

いつもやつて使うのか。便利といえば便利。

寸胴を引っ張り出しながら、リコリスは少し感動した。

「あと、【フライパン】、【片手鍋】、【包丁】、【スペゲティーレードル】……【お玉】と【木べら】もかな」

こんなものだらうか。

近づいてきた物をひょいひょいと手にとつて考えてみると、ライカリスが隣から覗き込んできた。

「相変わらず前衛的な収納ですね」

「……でしょ？」

家主もズン引きするくらいにな。

でも、そうか。ライカリスはこの棚のことを知っているのか。
そういえば、ゲーム中、何度も彼を連れて家に来ていたし、料理
をしたこともある。知っていてもおかしくはない。誤魔化していく
本当に良かった。

「これ、下はどうなつているんですか？」

「さあ？」

「ひとつちが訊きたい、そんなこと。

興味深げに身を乗り出すライカリスにハラハラする。どうなつて
る分からぬだけに心配だ。落ちたらどうしよう。

彼の服の裾を握りながら、そこでふと、他の可能性に思い至った。

(あ、もしかしたら奥行きがあるっぽく描かれただけの絵だつたり
して)

蝙蝠が動いていたのも、動画だと思えば。

安心しかけた時、ライカリスが僅かに身じろいだ。
え、まさか落ちる？ ギョッとして裾を握る手に力を込めるが、
彼は何事もなく上半身を戻して、次いで引き抜かれたその手には、
黒い塊が。

「捕まえちゃいました」

やたらと大きな蝙蝠と、10センチの距離で目が合ひ。

大人しくしている蝙蝠は、よく見ると怯えているようだった。さ
すが野生動物。自分を捕らえた男が危険なことを、本能で察してい
るようだ。

小さいながらもつぶらな瞳が、助けを求めるようにリコリスを見
ている。

「逃がしてあげなさい」

「はい」

当人もただ何となく捕まえてしまつたのだろう。再び棚に腕を突つ込んで蝙蝠を緩く放り投げた。城の方へ飛んでいくのを、リコリスは見届けた。やっぱり本物なのか、この中。

「……」

まあ、いい。悩んでも仕方がない。今すべきは料理だ。リコリスのスルースキルはわりと高い。

リコリスは調理台の前に立つた。彼女の前には食材が並び、調理されるのを待つている。

冷蔵庫の中は、例によつて異空間だったが、今は触れないでおこうか。

(ところでコレ、どうするの?)

このまま始めてしまつてもいいのか。

調理台に向く視線に少し力を入れると、べろんと画面が表示された。レシピ一覧だった。リコリスが今まで集めた大量のレシピが載つている。

この中から目的のトマトパスタを探し出し、選択するとレシピ一覧が消えて、レシピが出てくる。

(……ん?)

表示させてからリコリスは気づいた。

そこにはやたらと詳しい手順が書いてあり、代わりに【開始】ボタンは存在しなかった。レシピは調理の邪魔にならない位置に浮いていて、とても見やすい。

といふことは。

(え、ガチで作れってこと?)

普通に料理しようと。道具と材料揃えて、開始ボタンをポチッ、トントントントンペペーンはどこに行つた。

「何か手伝つことがありますか?」

固まつてていると、ライカリスが覗き込んでくる。
はつとした。このままではいくらなんでも不審すぎる。

「あ、じゃあ食器お願い……」

取り忘れた皿とフォークを頼む。「はい」と返事をして棚の前にしゃがみこむライカリスを見下ろしながら、リコリスはため息をついた。

(いや、料理はできるよ。できるんだだけじゃある)

料理はまだいい。しかし他の生産スキルはどうなる。裁縫とか、切つたり縫つたりして装備作るのか。

予想外の展開に戸惑いつつ、ベーコンに包丁を入れた。

今日ほど料理ができるよかつたと思つ日はない。

強いて言えば、彼氏を家に招待して初の手料理を振舞う状況に似ている。……ちょっと違つか親友だし。

リコリスは元々一人暮らしだったので、手際は悪くない。作ったことのないメニューだからレシピを見ながらになつたものの、作業そのものはスムーズだった。

「美味しいですね、これ」

地味な木製テーブルに向かい合つて座り、嬉しそうにパスタをついているライカリスを眺めて、リコリスは今心底ほっとしている。内緒だ。

「そう? ジャあ、また忘れた頃に作つてあげる

「忘れた頃なんですか」

「同じのばっかりだと飽きない? 他にも色々作れるし」

そう言つと、ライカリスは嬉しそうに微笑んだ。

「色々作ってくれるんですね。……嬉しいな。楽しみです
「う

リコリスにとつては何氣ない言葉だったが、ライカリスにとつては『これから』を約束するものだつたらしい。想いが真つ直ぐすぎて、照れる。

「つ、作るよ、たくさんね。ほよんほよんに思えさせてやるんだか

「ら

「いえ、それはちょっと」

ライカリスが苦笑した。
照れ隠しだと、バレているだろうか。いや、肥えさせるのは本気
なのだけどね。

「ガリガリよりっぽっちゃつの方が好きだなあ」「えー……」

何やら本気で悩んでいる様子のがおかしい。
「ひそりと笑いながら、リコリスはぐいっとコップの中身を呷つ
た。中身はついさつき搾った牛乳だ。
ライカリスも食べ終わって、手を合わせている。

「（）ひそりまでした。あ。洗い物は私が」「いや、ライカは休んでて。そんな顔色で働かせるほど鬼じゃない
よ私」

しつかり食べて少しだけ顔色は良くなっているが、まだまだ。
食器を片付けようとするライカリスを、リコリスが止める。

「でも」

「後で畑の野菜収穫して町に行くから、その時に手伝つてよ。今は
休憩。ね？」

手伝わせるといつても、そんなに働かせるつもりはないのだが、
それは言わないでおく。

「……分かりました」

渋々頷かれる。

それでも食器は運んでくれるらしい、リコリスの分の皿も重ねられて流しに移った。

洗剤は流しとセットなのだろうか。思い返してみると、そんな装飾がついていた気もある。

皿をスポンジで擦りながら、リコリスは後ろに声をかけた。

「お昼寝してもいいよ？」

「私が寝たらリコちゃん、どこかに行つたりしませんか」

「しないしない。誰かさんがまた泣いちゃつたら困るしね」

返事はない。言い返せなかつたようだ。

洗い終わった食器を立てかけて、濡れた手をタオルで拭いながら振り向くと、いつの間にかベッドに移動していたライカリスが、リコリスを見ていた。

目が合つと、ぽんぽんと隣を叩かれる。

リコリスは肩を竦めて、その要望に従つた。

「甘つたれ」

また返事はなく。

リコリスの肩に、そつと頭が乗せられる。さうすると髪が流れた。何も言わないので、そのままにしておいつ。

(こ)後の収穫は 妖精さんたち呼べるかな

妖精師のリコリスは何種類かの妖精を呼んで使役できる。その中に家妖精という種類がいて、戦闘には参加できないが、牧

場の仕事を指示しておけばやつてくれる。牧場を見た限りではないなかつた。未召喚状態で引つ込んでいるのだろうと思う。思いたい。妖精師なのに妖精が呼べないと、まさしく役立たずだ。

(収穫したら町に行つて、話を聞いて)

住人たちを思い浮かべる。

ライカリスのように、プレイヤーのパートナーだったNPCもいたはずだ。彼らはリコリスを見てどんな反応をするだろう。

(あと、扉を直さないといけないし、お風呂もなんとかしないと)

よく考えたら、最低限すらそろつていらない、この家。

修理と増築諸々でいくらくらいかかるだろう。

確認しなくとも知つていい己の所持金。柄が少なすぎて覚えてい
る。諸事情で貧乏街道まつしげらのリコリスには頭の痛い状態だ。
覚悟の上の貧乏だつたが、現状は予想外で溢れている。

作物を町の人々に売りつける気はないし、プレイヤー市場がない
だけに稼ぐ場が限られてくる。オークションや露天システムで、い
くらでも物を売り買いできたゲームとは違うのだから。

冒険者ギルドに依頼を受けに行くにも、スイエルの町に支部はな
いし、転移装置も動かないようだから難しい。

まさかこのレベルで必死の金策をする羽目になるとは……。

扉を直すくらいなら自分でもできるだろうが、お風呂は無理だ。
近所に天然温泉があるから、毎日そこまで通うしかないか。

悩むことしばし。不意に肩にかかる重みが増した。静かな呼吸音
が聞こえてきて、ああ、とリコリスは納得する。

少し身体をすらすと、凭れかかってきていた上半身が彼女の前に
落ちてくる。それを、頭が膝の上に来るようそっと調整して、髪

を束ねる紐を解いた。

田は覚まさなかつた。あまり熟睡できないのだと以前聞いたこと

があるが、相当疲れていたのだろうか。

真っ直ぐで柔らかい髪を梳いてみる。

起きた時には、もう少し元気になってくれていたら嬉しい。

「おやすみ、ライカ」

第4話 巨大蝙蝠ヒトマトパスタ（後書き）

トマトパスタは、フレッシュショットマトのアマトリチャーナのイメージです。

第5話 家妖精とやつぱり蝙蝠

ライカリスの寝る時間は、リコリスにとってなかなか有意義な時間となつた。

【メインメニュー】

【ステータス】

【スキル】

【フレンド】

リコリスの意思に応えて、次々と画面が目の前に現れる。わざわざ壁に出でなくてメニューゲ出せるように練習していたのだ。

トマトパスタを作つた時、空中に浮いたレシピは、ライカリスには見えていなかった。

レシピと同じように各メニューも他人に見えないのなら、いちいち口に出して表示させていたら独り言の多い人になつてしまつ。それでなくとも、念じるだけで扱えたほうが、便利に決まつている。ライカリスが寝てているのでうるさくはできないし、ちょうど良かつた。

「ふう……」

最後に【クローズ】と念じて全ての窓を閉じて、彼女は一畳を閉じた。

意識を集中すると視界の端に簡易情報が見えるようになったのも大きい。リコリストの名と、HP、MPと日付と時間が表示される。気を逸らすと見えなくなるので邪魔にもならないし、便利だった。

『 夏の月2番田 3日 午後1時 』

現在はこう。そういえばトマトは夏の作物だった。ここに現れた当初、日差しはまだ柔らかかったが、今はきつい。夏だと知つて納得する。

この家には時計がないから分からぬいが、時間も間違つてはいないだろう。

最初にメニューを出したときには1~2時を少し過ぎたくらいだった。このお昼寝もそろそろ1時間強。

本当によく寝ている。

自分の簡易情報を出す時のように見つめると、ライカリストの情報が出てきた。名前とレベルと、HP、MP、そして状態『睡眠』がある。

つつき甲斐のない頬をつづくと、ライカリストは低く唸つて眉間に皺を寄せた。

「ライカ。そろそろ起きないと夜寝られなくなるよ」
「んー」

イヤイヤと首を振る。膝の上でやられると、とてもくすぐったい。

「ライカ」

むーむー唸るライカリストに何度も呼びかけていると、5分ほどし

て漸く瞼が持ち上がり、た。
予想外に寝起きが悪い。

「……リコ」

「おー、おはよ、ライカ」

「ん。……夢？」

ぽんやりした田で問われる。何を訊きたいのか分かつて、リコリスは首を振った。

「夢じゃないし、ここにいるよ」

「ん、んん」

それから、しばしば瞬きが繰り返される」といえば。虚うだつた視線がはつきりして、リコリスを見上げた。

「おはよう。寝坊助」

「……そんなに寝てましたか」

「ううん。1時間くらいかな」

ライカリスが田を擦りながら体を起こした。それを待つて、リコリスはコップに水を汲みに行く。
未だ睡魔と闘っているのか、額に手を当て、不機嫌に顔を顰めている様子は、昔のライカリスを思い出させる。掠れた声も低く無愛想だった。

「はい、水

「はあ、どうも」

そつけない礼を述べて、ライカリスが水を受け取る。その様子を

じつと眺めると、訝しげに横田で見返された。

「何か？」

「何か？」と「どうも」……本当に初期の彼のようだ。訪れるといとも嫌そうに、最低限だけ口を開いていた。挨拶もなく、返ってくるのは迷惑そうな、蔑むような視線のみといつ。

ゲームだったから耐えられたし、ムキにもなつて必死で通つたが、今現実にそれをされると。

（下手したら泣くな、私）

それくらい、態度が悪かったのだ。再会してからはかなり遠のいているが。

リコリストは警戒されないよう、ゆっくりと動いて、田の前の横顔に触れた。

「顔色。少し良くなつたかなって」

「あ……」

触れる手にはなされがまま。髪を梳いてやれば、気持ちよさそうに田を開じる。

「すみません。まだ少し頭がはつきりしなくて

「そか。もう少し寝かせてあげればよかつたね。ごめん」

「いえ、大丈夫です」

なんだつたら、町に行っている間に寝ていてもいいのだが。それを言うと猛反発されて更に情緒不安定になりそうだったので、黙つておく。

リコリスとしても、町へはついてくれた方が嬉しいし、どうせ一緒に行くことになるなら、機嫌良くてもらいたい。

なんとなくライカリスの扱いが分かつてきただとか、当面落ち着くまでは余計なことを言わず、好きにさせた方がいいという結論に達したのだ。

「大丈夫なら……」これから畠のもの収穫しようと思つんだけじ

「あ、手伝います」

「ありがとうございます。髪、やつたげる」

「あれ」

髪が解けていることに今更気づいたのか、一房摘まんでいるライカリスの後ろに回つて、リコリスは枕元に置いていた髪紐を手に取つた。

「ねえ、ライカ？」

「はい？」

大人しくしている頭を見ながら、ふと湧き上がる悪戯心。

「なんならツインテールとか、おさげとか」

「やめてください」

「ちつ」

「えええ、舌打ちつて……」

この髪が綺麗すぎるのが悪い。けしからんキューティクルだ。デフォルト通りに縛つてはみたが、実はツインテールの野望を捨てていないリコリスだった。

「よし。じゃあ、やりますか」

「はい」

完全に目が覚めたらしいライカリスを後ろに従え、外に出る。家のすぐ前から見渡す限りの畑があつて、人力で収穫しようと思つたら、どれほどの時間と労力が必要だろうか。

妖精師でよかつたと、心底思った。他の職にはない恩恵だ。一呼吸置いて、視線を上げる。

【スキル選択】

【家妖精ランダム召喚】

【スキル発動】

キュイイイイ、と高い音がした。リコリスが期待を込めて見つめる先、ぽんつと可愛らしい音がして煙のようなエフェクトが現れる。その中には。

「わあーい。ご主人さまあ」

(なんだこれ、可愛いーっ)

黄色の三角帽子に、ゴーグルを引っ付けた小人が立つて、リコリスを見上げていた。

明るい茶色の髪はカールして、同じ色の瞳はくりくりだ。身長は、リコリスの膝くらいまでしかない。

ゲームにはない、凄まじい破壊力だ。

特徴からいつて、『テテ』と名づけた妖精だろうか。妖精たちには自分で名前をつけられ、家妖精は見た目の変更も可能だつた。小人の前にライカリスが膝をつき、小さな手と握手を交わしている。

「久しぶりですね、テテ

「はいっ！……？ ライカさま、お久しぶりなのです？」

挨拶に元気良く答え、それからテテが首を傾げた。かと思つたら、目を丸くして急に慌て出す。

「あわわわわ。ライカさま、大変です！ お顔が青いのです！ 具合悪いですかつ？」

どうやら家妖精の時間も、2年前から動いていないらしい。それにしても、独特なテンポの妖精だ。いや、可愛いけど。

「大丈夫よ、テテ。これからいっぱい食べさせて、いっぱい寝かせて、元氣にするからね」

「わあ。ぽよんぽよんにするですね？」

ライカリスの顔が引き攣つた。

「…………この主人にしてこの妖精あり…………」

ぼそりと言われた言葉は聞こえないフリで。さて、と氣を取り直す。妖精も無事召喚できることが分かつたし、収穫だ。

【スキル選択】

【家妖精全召喚】

【スキル発動】

最初のスキルとは違い、こちらは全ての家妖精を呼び出せる。職レベルをカンストさせ、全ての職業クエストを完了した、マスタークラスの妖精師であるリコリスが召喚できるのは、20人。全員に名前をつけるのが大変だつたが、苦労に見合うだけの恩恵はある。単調な牧場の仕事は全て妖精に頼んで、自分は狩りに行けたからだ。監督は要所要所でよかつた。

(現実になると、どうだか分からぬけど)

リコリスの周囲に次々とカラフルな妖精たちが現れる。

名前は『キキ』『ココ』『トト』『ナナ』『ネネ』『ノノ』『ミミ』『モモ』『ララ』『リリ』『ルル』『ピピ』『ペペ』『ポポ』『シユシユ』『ティティ』『ヴィヴィ』『チュチュ』『フイフイ』、そして最初に呼ばれた『テテ』だ。

名前につっこんではいけない。ネーミングセンスがないとも言わないで頂きたい。リコリスは名前をつけるのが苦手なのだ。それにも、きやあきやあ騒ぐ妖精たちは非常に可愛い。

「じゃあ皆、収穫のお手伝いようしくー」

『はあー!』

ざあっとカラフルなちびっ子たちが散っていく。

ところで収穫した作物はどうやって運ぼう。普通ならアイテムは

プレイヤーの四次元鞄に入れて所持するのだが。ゲーム中だと所持品画面は、マスとアイテムアイコンで表示されていた。
どこの棚と同じである。

「……」

リコリスは、自分の腰に不安な視線を落とした。彼女の腰には小さなウエストポーチが巻かれている。

プレイヤーの鞄は好みで見た目変更と機能拡張ができた。リコリスのウエストポーチはハロウインのときに限定販売されたデザインで、蝙蝠の形をしている。基本的に服や持ち物は、全てハロウイン調で揃えていた。

両端に小さな羽がパタパタしているのは可愛いのだが、口にギザギザの歯がついているのが、今となつては少し怖い。だつて噛みつかれそうだし。

可能なだけ拡張していたので、容量は最大だ。

軽く触れてみると、がばっと蝙蝠が口を大きく開けた。びくつとした。

そつと覗いてみた中は……。

「……」

どうやらゲームでの収納各種は、この世界では全て異次元になつているらしい。ハロウイングッズなだけあって、背景画像もそんな感じだったこのポーチ。

（蝙蝠の口を覗くとそこは魔界でした……って、腰に魔界の入り口とか怖いわっ）

使い方は棚の時に分かっているので、何とかなる、だろ？。多分。

リコリスとライカリス、20人の妖精たち。総勢22人での作業は早かつた。というか妖精たちの作業効率が凄い。

家妖精には牧場仕事専用スキルとレベルがあつたので、そのせいだろうか。

頭の上に器用に野菜を重ねて、せつせと走り回っている光景は、可愛いと思うべきか。しかし、動きが高速すぎてどちらかといふとシユールなような。

どんどん集められる野菜を、リコリスはせつせと自分のウエストポーチに放り込んでいく。

野菜でいっぱいだつた広大な畑が、さくさくと禿げていく。時間をおいて何度も収穫可能な苗以外は、残らず刈り取られていった。

「やることあります。手を出したら邪魔になりそうです」

リコリスの隣で、ライカリスが呟いた。

彼も最初は参加していたのだが、妖精たちの勢いに負けたのか、戻ってきていた。

図らずも、あまり無理をさせたくなかつたりコリスの予定通りだ。

「だねえ。さすがというか、なんというか。すごい子たち」「ええ。さすが、あなたの家妖精です」

あなたの、が強調されている。

ちら、と見上げると、優しく見つめ返された。そういうことか。

「どおりで。やたらと愛想がいいと思った」

この人間嫌いが。

「彼らは人間ではないですし……妖精師の妖精は、その人の一部で
しょう？」

「それはそうだけど」

「あなたの妖精はとても可愛くて、愛しいと思います」

「…………ああ、そう」

反応に困つたり「コリスを、誰も責められないだろう。
深い意味はない。ない。ないつたら、ない。

「ご主人さま、お顔が赤いのです！ 大丈夫なのですか？」「
わあ？！」

突然声をかけられて、リコリスは飛び上がる。
いつの間にか妖精たちが戻ってきていた。最後に回収された野菜
と一緒に。

「お顔赤い！」
「ご主人さま、ご病気？」
「きやあつ 大変なのです」
「大変！」
「大変！」

20人が皆でパニックを起こすものだから、收拾がつかない。
拳句、ライカリスにまで顔を覗き込まれる。

「大丈夫なんですか？」

「大丈夫！ なんでもないからつ」

なんの羞恥プレイだ。

咄嗟に否定するが、彼は納得しなかったようだ。風邪でも、と額に触れられそうになつて、リコリスは慌ててその手を避ける。

「……」

「ホ、ホントに平氣。具合悪くなつたら、ちやんと言つよ。約束したもん」

「……分かりました」

渋々と手が戻された。

「ほら、おチビたちも。私は大丈夫だから落ち着いて」

「大丈夫だつて」

「大丈夫？ ほんと？」

「ご主人さま元氣！」

「よかつた！」

「よかつたね！」

元から落ち着きがないので、パニックが収まつてもあまり変わらなかつた。単純で可愛いけど騒々しい。

リコリスは深呼吸して、転がつているトマトをひとつ拾い上げてポーチに放り込んだ。それを見た妖精たちも各自野菜を拾い、彼女に手渡そうとしてくる。

受け取ろうとして、リコリスは先を越された。

何に？ ポーチに、だ。

ぐわば！ と一際大きく口を開けた蝙蝠に、ぎょっとして硬直する。

直後、全ての野菜が吸い込まれていつて、あつという間に最後の

トウモロコシが消える。口を開じた蝙蝠がげふつと鳴いた。

(気にしたら負け。気にしたら負け。気にしたら負け。気にしたら負け………)

モノは考えようだ。蝙蝠も手伝ってくれたのだと思えばいい。妖精たちは「ウモリウモリ」と楽しそうだ。

「リコさんの持ち物は、本当に独特ですよね」
「……ははは」

ホントにな。
しみじみと感心されて、リコリスは乾いた笑いを零すのだった。

第6話 いざスイエルの町へ

森の小道を、ライカリスと並んで歩く。

リコリストの牧場は森に囲まれていて、少し歩けばスイエルの町だ。

各村や、町にはそれぞれ近所に、広さや土地の値段は様々だが1箇所空き地がある。大きな都市だと複数ある場合もあった。
本来は別エリアに作成されるプレイヤーの牧場だが、条件を揃えればその土地に自分の牧場を、育てた状態のまま引越しせられるのだ。

陸続きになることでNPCが遊びに来るイベントが頻繁に発生する他、専用クエストや専用アイテムも用意されていた。また、その町の住人として認められることになり、買い物で割引になるなど、恩恵は大きい。

しかしその条件というのが非常に玄人向けで、どのくらいかと問われれば、リコリストの財布がすっからかんになるくらい、である。
他にも、パートナーが必須で、近くに住んでいないといけないとか、近所に暮らす人々全員と友達にならなければいけないとか、ボスを1000回倒して出るか出ないかというアイテムをとつてくる等々とにかく大変だったのだ。

そうして禿げそうなほど苦労して手に入れたリコリストの土地は、スイエルの町の真南。歩いて1、2分で町の外れに辿り着く。
妖精たちには所持していた種を渡し、作業の続きを留守を任せってきた。

これで牧場の心配をすることもなく、心置きなく住人たちとの対面に緊張できるはずのリコリストだったのに、それよりも今は隣を歩く男が気にかかる。

町に近づくにつれて口数が減り、無表情になつていいくのが怖いの

だ。

元々ライカリスは、誰にも会わずにいられるように、モンスターが弱く、食料も豊富な地域に引き籠もっていた厭世家だ。それをリコリスが時間と手間をかけ気合で引っ張り出したわけだが、大人間嫌い今まで治つたわけではないので町に行くのが嫌なのだろう。

(重い。沈黙が重い……！)

ただでさえ緊張してきているのに、唯一の味方が敵になつたようで辛い。

「リコさん？」

いつの間にか足が止まっていた。不審そうなライカリスの声ではつとする。

「あー。えっと、ライカ？」
「はい？」

ん、と田の前の男に手を差し出す。無表情な視線がそれを見下ろして瞬ぐ。

「繫げと？」
「……ダメ？」

後を引きそうな心労よりも、一時の恥とそれに勝る安心を選んだリコリスだった。

「どちらが甘つたれなんでしょ？」「うぬ」

眉寝の前にライカリスに言つた言葉を返されて、リコリスが詰まる。

しかし、意地悪な微笑に負けて引っ込めようとした手は、するつと指を絡めとられて彼の近くに留まつた。

そのまま手を引かれる。

「すみません、「冗談です」

「……「冗談？」

「ええ。「冗談」

苦笑してから、ため息混じりに眉尻を下げる。

「これから多分もつと機嫌が悪くなると思つので……先に謝つておきますね。すみません」

「え、自分で言つちやうんだソレ」

「言つちやいます。リコさんに嫌な思いをさせたくないんですけど、こればかりは自分でもどうしようもなくて」

「難儀な奴……」

「すみません」

そんなど、そこまで嫌か。

重ねられた謝罪に、リコリスは首を振る。

「いや、なんていふか」「いや。牧場で待つてつて、言つてあげられなくて」「めんね」

「それは言つてくれなくていいです。言われたら落ち込みます」

「ああ……ホントに難儀だわ……」

それでも、行かないわけにはいかない。

歩みを再開してすぐに町に入った。

一応目的地は決めてあるが、それまでに知り合いにも会つだらう。そう思いながら進んで、しばらくしてリコ里斯は首を傾げた。

「人いなさすぎじゃない？」

今通り過ぎた広場なんかには、この時間帯、町の子どもたちが遊んでいたはずだが。

「余所者が入り込んで治安が悪くなつてますから。食料田当てでやつてきたみたいんですけど、そういう人間は態度と頭が悪いですから、無駄に波風立てるんですよ」

「へ、へえ」

「面倒なので殺してしまおうかとも思つたんですけどねえ。止められてしまいまして」

「えーと」

「とりあえず町の人間に被害が出そうな時だけ手を出して、残りの馬鹿は馬鹿同士でぶつかつてるみたいだつたので、放つておきました」

「……ソウテスカ」

お前が一番物騒だ！

そう叫ばなかつたりコリスは、代わりに多大な精神力を消費した。ライカリスが見張つてくれていたから町の人々が無事なのは理解できるのだが、でもやっぱり毒舌怖い。毒舌だけで済んでいなさそうなところが更に怖い。

そしてひとりの知り合いにも会わないまま、目的地に着いた。白い壁に赤い屋根の、可愛い印象の屋敷だ。塀はないが、他の家より

も少し大きい。

小さな庭を通りて、扉の前に辿り着いて。

(つて、これゲームなら普通に無断で入っちゃうけど、今やつたら
まずいよねえ？)

リコリスは彼女の常識に則つて、まずノックをするべく手を上げる。

もちろんライカリスと繋いでいるのとは反対の手だったが、そこで突然繋いでいた手を振り解かれて、驚いて動きを止めた。

「待つて」

「え？」

「わあっ」

そのまま素早く腰を抱かれて、後ろに引き戻された。抵抗もできず、反動で頭がライカリスの胸に当たる。

何事かと、きょとんと目を瞬いたのと同時に。

「リコリス！…」

凄い勢いで扉が内側から開かれ、迫力の美人が飛び出してきた。勢い余つて壁にぶつかった扉が、ミシミシと音を立てる。

え、何コレ、デジャヴ。

赤みがかつた金髪のその美人が、リコリスを抱きしめる人物と似ているからなおさらだ。

「ママ・マザー・グレース」

リコリスは顔を強張らせながら、田の前で息を切らせていく大柄な美女を見上げた。

マザー・グレース、本名はグレース・リッカー。プレイヤーの案内人として一番初めに会う人物で、ゲームの説明を始め、アイテムやクエストをくれて、とにかくとてもお世話になるNPCだった。

町長さんである田那さんを支え、町民にも慕われる町のマザー。面倒見のいい、優しい人だ。

確かに娘息子が合わせて5人いたはずだが、未だ翳りの見えない美貌をもつ。

そして。

「もう少し、落ち着いて出てこられないんですか？ リコさんガ怪我をしたらどうするんです？」

忌々しげに言つライカリスの、実のお姉さんだ。

家の扉を吹き飛ばされたリコリスからすると、お前が言つなや！ という台詞だが、ライカリスが後ろに引っ張つてくれなかつたら顔面強打の憂き目に遭つっていたのも事実。

さすが血縁。

「あ、ああ。すまないね、リコリス」

「い、いえ」

「ああ、そんなことより、リコリス。今までどこにー、あ、怪我をしてたかもしれないんだ、そんなことよりなんて言つたらいけないね。ごめんねえ！」

混乱しているようだ。

心配してくれているのは伝わってくるし、当たり前のよう受け

入れてもらえたことがとても嬉しい。

だが、少々勢いがありすぎる。ぐいぐい詰め寄られて足が勝手に下がろうとするが、ライカリスに抱きすくめられていて下がれなかつた。

「えと、すみません、マザー・グレース。説明しますから、ちょっと落ち着いて……」

お願いしかけて、今度は後ろから大きな声が上がつた。

「あああ！？ リコちゃんだ！ リコちゃんがいる！…！」

住人に見つかつたらしい。

「何イ？！ どこだ！」

「リコ嬢ちゃんだと？！ 帰つてきたのか？ 無事なのかつ？」

「リコちゃん！ リコちゃん、大丈夫なの？！」

「母ちゃん！ ライカ兄ちゃんが、リコ姉ちゃん連れてきたよ！」

見覚えのある人々が次から次へと飛び出しへは集まつていくる。それまでの静けさが、收拾のつかない大騒ぎに取つて代わられるまでに、いくらの時間もかからなかつた。

しかもその騒ぎはどんどん、どんどん大きくなつて、その中央にいるリコリストは激しくもみくちゃにされた。悲鳴すら喧騒に 否、リコリストの無事を喜ぶ声に飲み込まれていく。

「……」

その中でリコリストを抱きしめたままライカリスは沈黙を守つていた。

この騒ぎの中で腕に僅かのの揺るぎもないのはさすがだったが、

その視線は鋭く、騒ぎの輪の外を見据えていた。

きつときつと。 彼が余所者と呼んだ人々を。

第7話 宴と酒と招かれざるなんとか

「……とにかくで、ついにわざと帰ってきたところなんですね」

大騒ぎの1時間後。スイエルの町唯一の酒場、兼宿屋に場面は移る。

大勢の知った顔に見つめられながら、リコリスはここに至るまでの経緯を語った。

話せない箇所はほかしつつ、皆と同じように、2年前の異変に心惑いを見せて。

「そう……詳しいことはリコちゃんにも分からないのねえ。でも無事帰つてきてくれてよかつたわ」

「本当だなあつ 僕あもう、リコ嬢ちゃんに会えねえんじゃねえかと……グスツ」

そういうてほろほろと涙を流すのは、裁縫スキル伝道師フリージアと料理スキル伝道師アガベ。プレイヤーにそれぞれ生産スキルを伝授してくれるNPCだった2人は、要するに、リコリスにとつては裁縫と料理の師匠のような人たちだ。

2人が泣くのにつられてか、周囲から複数鼻をする音が聞こえてくる。同時に、良かつた良かつたと喜びの声も。

リコリスの前に小柄な初老の男性が立つた。柔軟な微笑と白い口ひげが印象的で、リコリスを見る目は優しい。

その隣には、マザー・グレースが寄り添うようにしている。

スイエルの町の町長、サマン・リッカーだった。マザー・グレー スと並ぶと凸凹コンビだが、とても仲のいい夫婦として有名だ。若い頃大恋愛の末に結ばれたとかなんとか、クエストが印象的だつ

たのをリコリスは覚えている。

サマンはリコリスの顔を真つ直ぐに見て、目を細めた。心なしか、その目が潤んでいるようだ。

「おかえり、リコリス。大事な仲間が無事に戻ってきてくれて、こんなに嬉しいことはない」

「……ありがとウ」やむこめめ

この町の人々は本当に温かい。

「あ、そうだ。サマン町長

「ん？」

感動しすぎて忘れるところだった。当初の目的を。腰からポーチを外して、サマンに差し出す。

「畑にあつた野菜、片つ端から集めてきたんで。皆で使ってください」

「しかし、それでは」

「町の人たちで、食べ物平等に分けてたんですね。ライカから聞きました」

申し訳なさそうなサマンに、リコリスは続ける。

「管理をお任せしますから。どうぞ、これも町の財産に加えてください」

今のリコリスから、町の人たちの気持ちに返せる唯一のものだ。この優しい人たちが食えるのも嫌だった。

周囲がざわつき、サマンがうつむくと困惑氣味に唸る。と、彼の

眼前にあつた蝙蝠ポーチの口が突然開いた。

「え？」

「ぶつ

口をすぼめて、何かを吹く。吐き出されたそれは、Jーんとサマンの額に当たつて、マザー・グレースの手に落ちた。
きゅうりだつた。

空気が凍り、サマンが額を押さえた。当然だが、痛かったようだ。

「す、すみません」

どうなつてゐるんだ、Jの蝙蝠。せつから自分の意志で動いて
いないか。

慌てるJのリスをよそに、満足げに口を閉じたポーチはそのまま
沈黙した。見事な丸投げ姿勢である。

「　　ぶつ

きゅうつを掴んだマザー・グレースが吹き出した。すぐには堪えら
れなくなつたのか、大きな体を揺すり出す。

「はつはつはつはー　いいじゃないかね、サマン！　鞄まで、好き
に使えて言つて貰つてやるよー」

(え、そつなの？　そつこつ意味なの、Jの蝙蝠つ~)

彼女があまりに笑うものだから、それがだんだん伝染していく
気がつけば皆が笑っていた。

「ええと、すみません。サマン町長……」

額にキュウリが強打した拳句に皆に笑われるなんて氣の毒だ。しかも一番大笑いしてるのが奥さんとか。

笑い声の中、リコリスがもう一度謝罪すると、サマンは赤くなつた額をさすりながら、それでもおおらかな笑みを彼女に向かた。

「いいんだよ。主人思いの鞄じやないか」

(主人思いの鞄とか、初めて聞きました)

「この世界では一般的なのか？　でもライカリスは独特だといつていた。

なんとも言えない表情をしたりコリスに、サマンが頭を下げる。

「こんなに町の者たちが笑っているのを見たのは久しぶりだ。本当にありがとうございます、リコリス」

「いえ、そんな」

恐縮してしまった彼女に、サマンがひとつ頷いて、ぱんぱんと手を打ち鳴らした。

場を満たしていた笑いが引いて、全員の目が彼らの町長に向く。

「ありがたく受け取ることにしよう。大事に食べさせてもらひよ、リコリス」

「はい。また収穫したらもつてきますから」

「断つても聞き入れそうにないね。でも、無理はしないでほしい」

真摯な言葉に、リコリスは頷く。

「さて、では今夜は、我々の仲間の帰還を祝して、皆で騒ごうじゃないか」

それを聞いた人々の顔が輝いた。

「宴会だーっ！！」

誰かが叫び、わあっと歓声が上がった。
そして、宴の準備のために、1人、また1人と酒場から飛び出していく。

「私も何か手伝いを」
「準備ができたら声をかけるから、主役は2階でゆっくりしておいで」
「でも……あ」

サマンはにこやかに去っていつてしまつた。
その背を見送るリコリスの肩に、手が置かれる。

「ライカ」

話し合いの最中、リコリスの後ろに控えて、全く口を開かなかつたライカリスが、彼女を酒場の2階、客室の方へと促した。
大人しく従つて階段を上がる途中、ふと、ライカリスが振り返つた。

「そうだ、リコさん」

「ん？」

「お酒は絶対に飲まないよ！」

「低く、重々しく言われて、リコリストが俯く。蘇る苦い記憶と、プレイヤーたちの叫び。

（もういえばこのキャラ、お酒飲めないんだった……）

この『アクティブラーム』というゲーム、クエストの途中で突然的にミニゲームが用意されていた。それはいいのだが。問題なのが、事前に情報を仕入れたからといって、クリアできるとは限らない、といつところ。

ある都市の酒場で発生するクエストでは、謎の飲兵衛と飲み比べになり、ミニゲームが発生した。無論、プレイヤー仲間の話や攻略情報から、ミニゲームの存在は知っていたリコリストだったが。

（だからって、クリアできるわけないってのよ。あんな弾幕ゲー）

肝臓の働きの一部として、無数に撃ち込まれるアルコールダメージを回避、大元のアルコールを撃破（分解？）していくといつ、意味不明な弾幕回避シューティングゲームだった。本当に意味不明だった。しかも残機は1。考えた奴出てこいである。

このゲームに失敗すれば飲み比べに負けたことになり、結果お酒に弱いキャラにされてしまうのだ。このクエストの時NPCを連れていれば、勝ったときは祝われ、負けたときは介抱してもらえるという特殊イベントも発生する。

元から弾幕ゲームが得意だったとか、特殊な一部を除き、『アクティブラーム』のほとんどのプレイヤーが酒に弱いという設定になつた。パートナーに介抱してもらいたいといつ理由でさつたと負けたプレイヤーも多かつたが。

リコリスは例によつてライカリスを連れて歩いていたので、彼の忠告も理解できる。

ちなみに介抱イベントは目を覚ましたら朝だつたというお約束の展開だつた。要は酒で記憶が飛びました状態だ。プレイヤーの間でも様々な憶測という名の妄想が飛び交つていた。

（何があつたのかな）。何やらかしたのかな～私は。フフ……怖くて訊けない……）

願わくば、ただ倒れただけであつてほしい。

「……了解」

忠告に素直に頷いて、彼女はため息をついた。

宴会はジユースをお願いすることにしてよ。

宴の始まりは、日暮れと同時だつた。

酒場の庭にまで煌々と明かりが灯され、中も外も大騒ぎだ。見た感じ、リコリスの知る町の住人全員が集まっているようだつた。

リコリスは既にボロボロだつた。

髪をかき回され、背中を叩かれ、しがみつかれ抱きつかれ、泣かれて、時に怒られて。必死に固辞したので、酒を飲まずに済んだことだけが救いだらうか。

しかし、それでも何故か頭がふわふわするのは、酔っ払いたちの呼気のせいかもしれない。これは予想外だ。

ようやく開放されたのは、子どもたちがうとうとし始め、大人たちに酔いが回って、リコリスをさほど気にかけなくなつた頃。といつてもど真ん中にいたのでは絡まれるので、彼女はこそそと隅に移動していた。

壁沿いに移動しながら、リコリスは自分のパートナーを探す。

(あ、いた)

宴の輪から外れた、酒場の隅の方にライカリスは立っていた。壁に背を預け、無表情に目を閉じて、手には木のコップを持つている。

誰ひとり彼に声をかけないどころか、その周囲だけぽっかり空いているのである意味とても目立つ。彼の人間嫌いを知っている住人たちの優しさなのか？

リコリスは静かに近づいて、ぴたりと寄り添つように隣に立つた。
……ここが一番落ち着く。

ライカリスはちら、と彼女に視線をよこすものの、口を開く気はないらしく、黙つてコップを傾けている。

「中身、何？」

「……飲ませませんよ」

酒か。

そういえば、相当酒に強いのだったか。そんなクエストだかイベントがあつた気がする。

「飲みたくないけど、もつ空氣だけでいっぴいいっぴい。むしろもう酔つてる気がする~」

「……」

酒場内は、今とても酒臭いことになつていてる。

リコリスが言えれば、ライカリスは眉を寄せた。ちつと小さく舌打ちして、彼女の腕を掴む。

「出ますよ」

「へ？」

「外なら少しはマシでしょ」

「え、え？」

リコリスが目を丸くする。

ちょっと酔ったかもしれない程度で、そんな対応されるとは思つていなかつた。

介抱イベントの時、何があつたのか本気で恐ろしい。

（そんなんに？ そこまで？！ ちょ、本気で何したの私っ）

内心パニックを起こすリコリスを引き摺るようにして、ライカリスは酒場の出入り口に向かつ。

が、そこに辿り着く前に彼は足を止めた。そして。

「 つ？！」

リコリスが思わず息を呑むほど、彼の纏う空気が尖つた。

ぴり、と僅かな酔いなど、一瞬で醒めそうなほど、鋭い気配。これが殺氣だといわれれば、納得できる。

どうした、と問う必要はなかつた。

酒場の外がにわかに騒がしくなつたからだ。今までの陽気な騒ぎとは違う、不穏なそれ。

酒場の大きめな出入り口を通つて現れたのは、体格はいいが柄の悪い男たちだつた。

見るからにまつとうな人種ではない。といつか分かりやすすぎる。

「おう、楽しそうにやつてんじゃねえか」

「ひつでえな」。俺たちには食つ量減らせつて言つておいて、自分たちだけ宴会ですかあ～？」

3人。それぞれが品のない笑みを浮かべて、周囲を見回し……その視線がリコリスに止まつた。

矛先が自分に向くことに、リコリスも異論はなかつた。レベル的に考えて、どう考へても矢面に立つべきは彼女だろう。だが彼らが動き出す前に、その前に立ちはだかつた人がいた。

サマン町長だ。

小さな背中に、町民を守るのだという意志が見えた。

「今夜は我々の大切な仲間の無事を祝つ夜だ。君たちは酒に酔つては暴力を振るおつとするからね。悪いが今夜は遠慮してもらいたい」

一回り以上体格の違う相手を見据えて、きつぱりと告げる。

立派だし格好いいし、庇つてもらえて嬉しく思うが、リコリスと

してはヒヤヒヤだ。

案の定、男たちはサマンに怒りを向けた。胸倉を掴み上げられて、彼の足が浮きかけるのを見て、マザー・グレーースが眉を吊り上げる。

「ちょっとあんたたち――！」

リコリスも動いた。スイエルの町の住人の、誰ひとり、怪我をさせることはない。

「町長、交代してください」「リコリスト……」

進み出た彼女に、サマンが呻く。心配そうなその瞳に、大丈夫、と頷きをひとつ。

突き飛ばされるように開放されたサマンを支えて、下がらせた。

正直な話、この男たちに限っては、本当に全く心配は要らない。リコリストが確認したかぎり、男たちのレベルは高くて20そこら。レベル1000のリコリストには、真剣で斬りかかっても傷ひとつつけられない、はずだ。多分。むしろ心配なのは、近くにいるだけで卒倒しそうな殺氣を放っている、リコリストの隣の方だ。

「嬢ちゃんが帰ってきたって奴かい。へえー。可愛いじゃねえか」「だなあ。この嬢ちゃんに相手してもらえんなら、このオッサン見逃してやつてもいいなあ！」

「嬢ちゃん楽しませてやりやあ、食いモンたくさん貰えんだろう？」

限界だった。誰がつて、ライカリスが、だ。
その手が腰の短剣に伸びたのに気づいて、リコリストの方が慌ててしまつた。

彼女が咄嗟にその手を掴むと、思い切り冷たい視線が降りてくる。

「……リコさん」「この町の中で人殺しはやめなさい」

若干理由がずれているが仕方ない。もし安易に男たちを庇つような発言をすれば、その時は本当に止めて無駄な事態になるだろう。誰ひとり怪我なく、とは言わないうが、できるだけ人死には避けた

いつ「コリスである。

「これくらいなら、私が自分でやるよ。多分、ここに私が後ろにいるだけだったら、舐められて後が面倒だと想つ

「殺してしまえば面倒も何もないでしょ」

吐き捨てるライカラリスト、リコリスは意地の悪い笑みを浮かべた。

「殺さないよ。使い道決めたから」

「……は？」

男たちに向き直る。

散々馬鹿にされて怒りに顔が赤くなっていた。

「お話し合いは終わったかなあ？」

「言いたい放題言つてくれるじゃねえか」

それでも話が終わるまで待ってくれているんだから、根は悪くないのか。

そんなことを考えながらリコリスがゆつたりと構えた時、

「お待ちになつて」

鈴を鳴らすような声がした。

男たちとは間逆で品のいい、しかし人に命令することに慣れた声だった。

第8話 宴に咲く華

酒場の出入り口をくぐる一歩手前に立っていたのは、一日でこの町の人間ではないと分かる女性だつた。

ふわりと広がるロングドレスで生活する人間なんて、スイエルにはいない。

きっと食糧難で引っ越してきた、本来なら遠く離れた王都や、大きな都市にいるはずの貴族NPCだらう。

真っ白な肌を囲む、これまた色素の薄い髪をくるくると巻いて、長い睫に縁取られた目は吊り気味でとても気が強そうだ。翡翠の瞳に浮かぶ光も強く、それを裏付けているように思えた。

左右、背後と武装した女3人に囲まれていて、目立つこと立つこと。

(やついえは、こんな子が確か、王都の貴族街にいたなあ)

確かに、ペオニア・バークマンだつたか。簡易情報を表示させ記憶が正しいことを確認する。

一度クエストで関わつただけだから、彼女の方は覚えていないようだ。

もう少し若かつた気がしたが、2年間で成長したのだろう。不思議な感じだった。

護衛に扉を押さえさせたペオニアは、キツと視線もきつく無法者たちを睨みつける。

男たちもそれに応えて彼女に向かい、護衛の女たちも殺氣立て、一触即発の気配が色濃くなつた。

「見苦しいですわあ。庶民の宴に乱入して暴力を振るい、拳句この

ような小娘にあの下品な発言。耳が穢れるかと思いましてよ
「乱入してんのはてめえも一緒だろうが！　お高くとまりやがつて、
落ちぶれた貴族風情がよお」

なんだこれ。

急に置いていかれた感の強いリコリスの耳元に、ライカリスが顔を寄せた。

「例の馬鹿同士です」

「あ、あー、これが……」

馬鹿同士でぶつかり合つて、ライカリスに放置されたという人々か。

単体だと乱暴だつたり我慢で偉そつたりと迷惑だが、片方が住民に手を出そうとする、何故かもう片方がそれに絡んでくるといつ。

男たちのレベルは20くらい、護衛の女たちのレベルも20くらい。完全に拮抗している。

普通護衛というともつとレベルが高そつだが、これで務まつているところを見ると、男たちが意外と強いということか？

ヴォルデマードの、プレイヤーのパートナー以外のNPCレベル事情を思い出しつつ、リコリスは彼らのやり取りを眺めていた。護衛は一言も発していないので、ペオニアが男3人を相手取つているが、そろそろ子どもの喧嘩だこれは。

困った視線をサマンに向けると、同じく困つた視線が返つてきて、一層困惑する。

ライカリスは既に興味を失つたようで、そっぽ向いているし。

放つておけば、これはきっと朝までコースだらう。いくらなんでも迷惑だ。

そつと蝙蝠ポーチをつつけば、空氣の読める（？）蝙蝠は、彼女

の望む物をゆっくり吐き出した。

ステッキ
杖だつた。

短めの、真っ直ぐな木の棒の先端に小さなカボチャ頭がついている。リコリスが静かに杖を構えれば、カボチャ頭が淡く光り始めた。

【スキル選択】

【戦闘妖精ナイト召喚】

【戦闘妖精ポーン10体同時召喚】

【スキル発動】

ぶわ、とリコリスの周囲を風が渦巻く。

喧嘩の真っ最中の人々をぐるりと取り囲むようにして咲いた、半透明の大きな花の数は11。

花はくるくると回転して、その上に現れたのは、リコリスにとっては馴染みの妖精たちだった。妖精といつても、大きさは家妖精たちのように可愛いものでなく、大人と変わらない。

輝く鎧を纏うナイトとポーンは妖精師が召喚する中でも前衛役だ。そのレベルと数は召喚主の職業レベルに由来するが、リコリスが召喚した場合、そのレベルはいずれも1000。一番弱いはずのポーンですら、上位層とされるレベル800のプレイヤーと互角に戦える。

驚いた人間たちに騒ぐ間も『えず、ポーンたちが剣を構え、彼らを取り押さえた。

戦う術をもつ男たちと護衛には強く対応がなされた。瞬きひとつの中に、腕と足を取られ、床に押さえつけられ、首筋に剣が当てら

れる。

予想もしていなかつた展開に硬直したペオニアに、正面に立つたナイトが槍を突きつけた。

声も出ない様子の彼女の顔が、恐怖で歪むのを見て、護衛たちが呻き声を上げた。

「お嬢様……！」

実力はともかく、主人を思うその心意気は護衛の鑑。内心で賞賛しながら、リコリスは静かに声をかけた。

「大人しくしていれば、これ以上は何もしないよ」

進み出たり「リストの田には、怒りも嫌悪もない。

「こんばんは、今日スイエルの町の牧場に戻ってきた、リコリスです」

とりあえず自己紹介をしてみてから、リコリスはペオニアが泣きそうなのに気がついた。ナイトを見て、軽く手を振る。

「ナイト。槍を引いて」

命令に従つて引かれていつた槍に、やつと息をついた彼女は、それでもまだ唇が震えて、声が出ないようだつた。

でも座り込まず氣丈に立つていられるだけでも、相当凄いと思う。

「ここは私の大切な町なの。出て行けという権利は私にはないし、別に言うつもりもないけど……」

一曰言葉を切つて、リコリスは周囲を見回す。

酒場の中と外と、町の人々がじつと彼女を見守っていた。

「これ以上町の人たちに迷惑をかけるつもりなら、相応の対応をとらせてもらひう。言つておくれど、あなたたちは私の相手にはならないよ」

分かつてもらわなければならぬ。意外と憎めない人たちだから、尚更。

そう思いながら、リコリスは気がついていた。男のひとりが押さえられたまま、どうにかして動こうとしていることに。

その男の上にいるポーンに視線を送ると、忠実な妖精は僅かに力を弱め、男が動けるように剣を少しだけ下げた。もちろん、頭に血が上っている男に、気がつかれない程度に。

果たして、それをチャンスと見たのか、あるいはリコリスの思惑通りに男が動いた。

腕を大きく振つて、懷から取り出した何かを、彼女に向かつて投げる。

「へりえ！」

(……ナイフ。攻撃力5かあ、すつごい初期装備だけど)

レベル差のある相手からの攻撃だからか。止まつて見える、とは言い過ぎかもしれないが、見切るのに苦労はしなかつた。

リコリスは試しに当たつてみようかと考える。ゲームなら掠り傷ひとつ追わないところだが、今はどうなるのだろう。

それは、これからこの世界で暮らしていく上で重要な気がした。

試すなら、今は絶好の機会だ。

だが、もし。大怪我をしたらそれはそれで困るので、ナイフの軌

道を考え、頬に掠めるように微調整して……。

(あれ、でも……それってやつてもいいこと?)

不意によぎる、疑問。

たいした怪我じゃないとか、ちょっとくらい怪我をしても平氣だとか。こういつた行為をライカリスに絶対しないよう、約束させたのは他でもないリコリスだ。

多分怪我はしないと思うが、そういう問題ではない。ライカリスも納得しないだろう。

これは破つてはいけない約束。

実際には、投げられたナイフが彼女に届くまでの僅かな時間だった。

周囲には、突然のことによりコリスが立ち竦んだように見えたのか。息を呑む音が聞こえた。

刃はもう目前だったが、それでもリコリスには余裕をもつて回避できる距離だ。首を傾げてナイフを避けようとして。

ぱし、と微かな音がして、あっさりとナイフは止まった。
あまり手入れをされているとは思えないくすんだ刀身を、横から伸ばされた2本の指が挟んでいた。

刃先は、リコリスの顔から5センチのところで留まっていた。

「……何をやつてるんです」

ひどく呆れた声が降ってきた。

だが、対応が遅かつたことへの非難が込められたそれ。

「いやあ、避けよつか、投げ返そつか迷つかつて

試しに当たつてみよつと考えたことは、絶対に言わない。知られてはいけない。

リコリスの言い訳を聞いて、ライカリスはとても微妙な とうか呆れが更に色濃くなつた表情で、彼女の前から刃を退ける。

「あまりそつこつ」とをしないでください。怪我はしないでしきど……」

ひゅつとライカリスの腕が動いた。その動きは素早すぎて、何をしたのか分かつたのは、きつとりコリスと彼女の妖精たちだけだった。

「ひいっ」

床に顔を押し付けられた男が短い悲鳴を上げた。その鼻先の床板にナイフが刺さっているのを見て、人々は今ライカリスが何をしたのか理解した。

「本当なら、あなたが攻撃されるところなんて見たくない。あまり遊んでいると、私が彼らを殺しますよ」

言つやいなや彼から滲んだ殺氣は本物で、本氣だった。
男たちを抑えているポーンや、ナイトの方が戸惑つたように主とそのパートナーを見比べている。

彼らの主は死者を望んでいないが、ライカリスが相手となるとそれはとても難しい。しかもその怒りが主の為とあつては。

光り輝く高貴な妖精が揃いも揃つておろおろとしているのはなかなかに面白い光景だつたが、それを楽しめる強者はこの場にいなかつた。

「分かつてゐる。ごめん、ライカ」

「……やれやれ」

凄く不機嫌そうにだが、ライカリスは譲ってくれた。
それに心底ほつとしながら、リコリスは前に出る。
敵意と怯えが交じり合った視線を受けて、しかし彼女は微笑んだ。
さも余裕たっぷりであるように。

「今のところ、町の人に直接暴力とかつてないんですね?」

一応確認だ。酒に酔つて乱暴になるとはさつき聞いたが。
さつきのナイフはまあ、カウントしないでおくとして。
問われてサマンが頷く。

「何があると、彼らは彼らで喧嘩を始めるからね。後は、お金で食べ物を買い上げようと強く迫つたりか」

「それはそれで迷惑なんだけどねえ」

マザー・グレースが困つたように呟つ。

(その程度なら、手酷く痛めつけなくてもいいかな)

しかし、罰は罰。堪えなければ、意味がない。
少し考えて、リコリスはボーンたちを見た。

「ボーン、ちょっと女人たち操つてみてくれる?」「え?」

女たちの顔が強張つた。

ペオニアが制止の声を上げようとするも、それはすぐに、ポーンたちの遠慮ない手によって、悲鳴交じりの笑い声に取つて代わられた。

女性妖精師の使役する妖精は皆女だ。女同士なら、体をまさぐられても別にかまわないだろう。

さて、リコリスは今度は男たちを見る。一ひとちはもう決めてあつた。

「オジサンたち姿勢が悪いからね。ポーン、整体してあげちゃつて」

男たちの顔も強張つた。

やはり何か言おうとするが、に一つこりと笑つてスルー。容赦なく妖精たちにGOサインを出すと、甲高い笑い声に、野太い悲鳴が加わつた。

少しそれを眺めて、リコリスはおもむろにポーチを撫でた。途端、望んだものが彼女の手に転がり出でてくる。

透明な小瓶の中に紫の液体が入つていた。

目の前でそれを揺らして【沈黙薬】サイレンスジユースの表示を確認した。

それを7人全員に少しずつかけて回ると、その場が突然静かになつた。

「やっぱり、いるかいと迷惑だからね」

リコリスが使つたのは、過去のイベントで使われた、かけられた者に沈黙効果を与える薬品だった。本来は魔法を封じて悪戯するための物だが、解毒薬を使わない限り効果が消えないのに、今回はどうぞいい。

妖精師のリコリスにはそういうたスキルはないし、そもそもスクリだと効果時間があるから途中で切れてしまうから。

これで安心して朝までコースだ。

「うして、声なき悲鳴と笑い声を上げ続ける集団と、それをとて
も満足げに眺める美少女というカオスな光景が完成した。
町の人たちが若干顔を引き攣らせていたが、気にしない。罰は罰
なのだ。

第9話 一応存在する女心とやら

「じゃあ、すみませんけどマスター。朝までの人たち、お願ひします」

静かになつた酒場の入り口で、リコリスが頭を下げる相手は、この酒場のマスター兼、宿屋の店主エフススだ。

宴会はお開きになつて、ある者は陽気に笑いながら、またある者は「リコちゃん怒らせるのはやめよう」などと咳きながら、皆それぞれ家路についていた。

町長夫妻からは、ひとりの怪我人も出なかつたことを感謝されたが、リコリスはにっこりと笑つて、「賤はまだこれからです」と答えたのである。

皆を見送つて、リコリスはお仕置き真っ最中の7人を預かつてもうえないかと、マスターに頼んだのだった。

連れて帰つてもよかつたが、家は狭くて入れられないし、かといって家畜小屋や外に放置もあんまりだろつ。

いくら静かだとはいえ、あの不気味な集団を預かつてほしいと頼まれたエフススは、豪快に笑つて頷いてくれた。田々酔つ払いの面倒を見ている彼は、これくらいでは動じない。

「おう。今日はもう店仕舞いで、泊り客もいないしな。酒場の隅に置いておけばいいんだろ?」

「はい。朝一で引き取りにきます」

「任しちきな」

鷹揚に頷くマスターに再度軽く頭を下げて、リコリスはそろそろ、と踵を返しかけ。

「リコリス！」

「はい？」

「これからまた、よろしくな！」

「はいっ！」

建物に入つていくエフススの背に、リコリスはもう一度、今度は深く頭を下げた。

扉の閉まる音を聞いてから頭を上げると、彼女から一步引いたところに立っていたライカリスを振り返る。

「帰る」

「はい」

行きと同じようにライカリスと並んで歩く、既に深夜に近い町。昼よりもずっと涼しいが、それでも暑いことは暑い。
隣を歩く横顔には、穏やかな表情が戻り……と言つかむしろ晴れやかだ。そんなに歸れるのが嬉しいか。

（ん？ 帰る？）

はて。リコリスが歸るのはもちろん彼女の牧場だが、ライカリスはどうするのだろう。

（ついで、当然自分の家に戻るでしょう）

ライカリスの家はリコリスの牧場の田と鼻の先だ。

あの日常生活にも支障ある家に普通と一緒に歸ることを、欠片も疑問に思つていなかつたとか、少し笑える。

「リコさん。また足が止まっていますけど」

「え、ああ」

昼もいつして色々考えては、足を止めていた。
またしても立ち止まっていたことに気づいたリコリスに、ライカ
リスが手を差し出してきた。

「どうぞ」

「……………ありがとうございます」

瞳に悪戯っぽく輝く光を見たが、それには知らんぷりで、彼の手
に自分の手を乗せた。

指が絡んで、歩みが再開する。

「疲れたでしょう。今日はゆっくり休んでください」「
そうだね。あ、でも」

思い出した。

「何か?」

「いや……あの家、お風呂がない、から。温泉……行かないとい

「……」

微妙に咎める視線が刺さつた。言葉はないが、目線が語る語る。
リコリスは俯いた。

「もう夜中ですよ?」

「うーん。そななんだけど、でも」

「ここよ」ここよ言しながら腕を持ち上げて匂いを嗅ぐリコリスに、

ライカリスが顔を寄せてきた。

そのまますんすんと肩口を嗅がれて、彼女は硬直する。

「？！」

「別に臭わないですし。明日の朝、町に行く前でもいいじゃないですか」

「ぎゅああああっー！」

「オイコラ。ふざけんな。

なんてデリカシーのないマネをしてくれるのか。

咄嗟に繋いでいた手を振り解いて、ライカリスの顔面を手の平で押し退ける。勢いがありすぎたのか、べつ、と音がした。

「ふ。な、何するんですか」

「つるせーいつ！ あんたじゃ、なんてことすんのー。」「ええつ？」

「お風呂前の女の匂い嗅ぐとかどうなの？！」

リコリスはつーんと顔を背けて、おろおろしているライカリスを置いて歩き出す。怒りに任せて、随分と早足だった。
慌てて後ろから追つてくる気配があった。

「リコちゃん、『めんなさい』。そんなに嫌がられるとは思ってなくて」

僕は野菜を収穫したし（ほとんど妖精がやってくれたけど）、夜は酒場で宴会で（飲んでないけど）、しかも夏だ。空調もなかつた。この条件で匂いを嗅がれたい女がどこにいる。

「別に嗅がれたことが嫌だつたんじゃないのよ？ いや、嫌だつただけど……これがお風呂上りだつたら好きにすればって感じだけ

ビー。」

今はダメだ！ ないわ！

足の長さが違うからか、かなり早足のリコリスに悠々とついてくるライカリスは、しきりと首を捻っている。

「そんなに気にしなくてもいいじゃないですか。全然汗臭いとかもなかつたですし、リコさん普通にいい匂いですよ？」

いい匂いってなんだ、いい匂いって。

「だからそういう問題じゃないってば。ふんだ。いいもんね。ライ力もう家に帰りなよ。私一人で温泉行つてくるから」

「え、い、嫌です。ダメですそれだけは」

「知つたことかーっ」

帰れと言われてもついてくるライカリスは、宴会の時とは正反対に表情豊かだ。あの時の無表情や不機嫌な顔が嘘のように。そのことにじつそり安堵しているリコリスだったが、教えるつもりは全くない。

「じゃあ、脱衣所の前で待つてますからー！」

その提案に、リコリスは思わずライカリスを見上げた。少し冷静になつて、顔を顰める。

「……そこまでしてくれなくていい

牧場近くの天然温泉には、誰が造ったのか、小さな脱衣所が設けられていた。他は囲いも何もなく、周囲は森だ。

しかし、きつとリコリス以上に疲れているだれづライカリスは、苦笑して首を振る。

「ダメですよ。こんな時間にあなたを、あんな森の中でひとり出すなんて」

「……」

女心は理解してくれないくせに、こういうことは心配するのか。心配は素直に嬉しいけど、できたら逆がよかつた。

だって夜の森くらい、リコリスにはなんでもない。妖精を呼べばいいのだから。

怒りがだんだん諦めに姿を変えていく。

「 分かった。そしたら、温泉やめるから、ライカの家のお風呂貸して」

「え？」

進入可能なNPOの自宅には、ここまで細かくやる必要あるのかというくらい、オブジェクトが付属していた。

キッチンはあつたし、もちろんお風呂も。

ライカリスの家は小さいが、例外ではない。

これから温泉に向かつてそこで待たせるより、彼の家に直接向かつた方が負担が少なそうだ。ついでに言えど、温泉に行くよりそちらに行く方が近い。

「それはかまいませんが……」

「もう直接行つていい？ そんで、石鹼とかタオルとか貸してください」

お宅訪問だ。しかもかなり図々しい系の。

「ごめんね、妖精ちゃんたち。帰るの少し遅くなります。

「分かりました。じゃあ、ちょっと道を逸れますよ」

町の外れから、ライカリスに案内されて森に入る。彼の家までは道なき道だ。

だが覚悟して足を踏み入れた森は意外と暗くなかった。否、暗いことは暗いのだが、うつすらと見通しがきくのだ。少なくともどこに木があるのか判別できる。

もつと真っ暗で何も見えなくなるかと思っていたが、どうやらゲームと同じ程度には見えるようだつた。

少し見えていたら楽に移動できるだろうが、それは贅沢というものがだろう。

職業に魔法使いワイヤードを選んでいたら周囲を照らす魔法も使えたが、もちろんリコリスにそんな魔法はない。

確かに、【松明】がポーチの中に入っていた。出すべきか、とリコリスが考えた時。

「失礼
「え　わわっ」

振り返ったライカリスが、リコリスを両腕に抱え上げた。

「ちょっ」

「暗いですか、この方が安全ですよ。掴まつてくださいね」

そう言って、リコリスの返事も聞かずに動き出すので、彼女は慌てて目の前の首にしがみついた。

長年森で暮らしてきただけあって、リコリスの耳にはうつすらと見えるだけの木の根や枝をひょいひょい避けて、軽々と進んでいく。

リコリスが普通に歩くよりも速いくらいだった。

「顔、伏せておいてください。葉が当たるといけませんから」

そんな忠告もされたが、結局そんなことは一度もないまま、ライカリスは彼の家に辿り着いた。

といつても明かりがないので、リコリスの目には何となく小屋らしきものがある氣がする程度にしか見えないが。

迷いない足取りのライカリスが家に入ると、突然視界が明るくなつた。

「う

眩しい。リコリスはしばしばする目を擦る。

「大丈夫ですか？」

「うん……」

待つことしばし、ライカリスはリコリスの目が慣れてから、彼女を降ろした。

自動点灯したランプに照らされた室内は……不穏で怪しげだった。

ライカリスの仕事は他称薬師だ。

妙な薬を調合したり実験したりが好きで、森の中に引き籠もつて色々好きにやつていたら、どこからか聞きつけた人間がその薬目当てにやつてくるようになつたらしい。

いつの間にか薬師として認識されるに至つたが、本人曰く「いい迷惑」だという。

そもそも滅多に人に会わないから仕事として成り立つているのか微妙なところだが。

そんなわけで、家中の中は実に怪しい。

変な形だつたり干乾びたりしている謎の植物が、天井から吊り下がり、壁に貼り付けられ、机の上に鎮座している。毒でも付いていそうな大量の本は、本棚に入りきらずに部屋の隅に積みあがつているし、実験用のビーカーもいたるところに置いてある。しかも紫や水色の液体つきで。

ゲームで見慣れたと思つてたが、いざ田の前にあると相当のインパクトである。

「相変わらず、アレな家だよね」

もつと綺麗にしてそうな印象があるライカリスだが、家中の中はどう控えめに見ても乱雑。

昨日の洗い物が残つているとかいう汚さではないが、これもどうだろう。

当の本人は特に気にしていないようだ。

「リコさんは見慣れているでしょう？　2年前から、特に変わつてないですよ」

「そうだねえ」

怖くて掃除したいけどできない家のままだ。
立ち去りすりリコリスト、ライカリスが促した。

「必要なものは全部浴室にありますから、好きに使ってください」「うん、ありがと」

変な草を避けながら進んで、リコリストは浴室の扉をくぐつた。

「はふ～」

温かいお湯に包まれて、リコリスは満足げな吐息を零した。
置いてあつた石鹼をありがたく使わせてもらつて、全身磨き済み
だ。

これでいくら嗅がれても大丈夫。ドンと来い。

浴室は普通に綺麗にされていた。むしろさつきの部屋が異界だつ
たのだが。

入つてすぐのところに小さな脱衣所があつて、その隣が今リコリ
スが入つている浴槽だ。

横の壁には彼女が知るものと同じ形の水道があるが、ひとつだけ
違つのが、壁に繋がつてある箇所に、赤い石でできた輪が付いてい
るところ。

リコリスの家のキッチンの水道には、これはなかつた。
どうやらこれがお湯を出すのに重要であるらしいと思い至つたの
は、どうしたらお湯が出るのか素裸で散々悩んだ後だ。

見慣れない物がついていたので触つてみたら、その赤い石は微か
に輝きを発して、結果お湯が出たのである。

「魔法かなあ。明かりも火じゃないんだよねこれ」

頭上で輝くランプを見上げる。もちろん電気でもない。
宿屋で宴会の準備が整うのを待つていた時も、暗くなつたら明か

りは自動で点いた。

そういうえば、ゲーム中でも田が暮れると勝手に部屋が明るくなつていたが……。

「訊くに訊けないしなあ。後でこいつそり調べてみないと。さて」

あまり長湯しても迷惑だらう。

お湯から上がり、脱衣所の棚に置いてあつたタオルを取る。わしゃわしゃと頭を拭きながら、何気なく彼女が先ほど脱いだ服に視線を落とした。

(……ん?)

あることに気がついて、温まつたはずの体がすーっと冷えていく。リコリストは意味もなく下を見て、上を見て、それから虚しく首を傾げた。

「……着替え、ないじやん?」

迂闊。といづか。

(こんなとこばっかりリアルなお約束とかいらんわーー!)

……声に出さなかつた叫びは、どう考へても自業自得だった。

第10話 長い一日の終わり

しかし救世主は存在した。

リコリスが途方に暮れていると、棚に置いてあつたポーチが突然震えだした。

蝙蝠が口を開けると、服が上下揃つてぐるんと出てきて、更にその上に下着が一揃い吐き出された。

「おお?!」

慌てて広げてみると、それは彼女がゲーム中でいつか見た目に使うかもしれないと思つてそのまま忘れていたファッショングッズだった。

『アクティブファーム』では見た目用素材のファッショングッズが存在し、性能重視の一般装備に外見だけを移植できるようになつた。

そしてその装備品を全て脱ぐとあられもない下着姿になるが、それにもオシャレ下着なるものが存在する。

リコリスが着ていた服は、袖がふんわりした丈の短いジャケットの下に、後ろ側が蝙蝠の羽をデフォルメしたようなギザギザしたワンピース。前が短いそのワンピースの下にはショートパンツと蜘蛛の巣の柄の入つたレースのレギンスを履いて、と趣味に走つたものだ。

普段はつけないが、戦闘中に被る頭装備は小さなカボチャ帽子だつた。

ブーツと下着も含め、全体制的に黒で統一されている。

プレイヤーたちは皆それぞれ見た目にこだわっている者が多く、

リコリスの友人には黒のボンデージ、網タイツにピンヒールときて、武器まで鞭に変えていた者もいた。あれは胸の谷間が眩しかった。ただしそんなのでも、中身の性能は鬼畜と称された装備なのだ。

リコリスは蝙蝠を見る。なんて氣の利く鞄なのだ。感動させてもらつた。

吐き出された服には装備性能は皆無だが、だからなんだ。服があるだけいい。

いざとなつたら脱いだ服を着るという手もあつたが、あまりやりたくないし、ライカラリストに助けを求める……のはもつと嫌だ。

「所持品に入れてよかつた……。ありがと蝙蝠……」

新しい服はタイトなワンピースに無地のレギンスで、メイン装備とは反対に落ち着いた見た目だった。

落ち着いて、リコリスは今度はしっかり髪を拭いた。

浴室を出ると、椅子に座つて本を読んでいたライカラリストが顔を上げた。リコリスを見て、きょとんとする。

「どうかした？」

「いえ。初めて見る格好だったので……髪も濡れているから、なんだから別人みたいですね」

「そうかなあ」

諸事情により、性能にも見た目にも「だわつていられなかつたが、リコリスとしてはなかなか可愛いと思って取つておいた服だ。結局ゲームでは出番がなかつたが、今は大活躍である。

「変？」

「いいえ、可愛いです。普通の女の子みたいですね」

「どういつ意味かな、ソレは」

「普段は普段で素敵ですよ?」

つっこみたい。ついでにリコリンのひとつもくれてやりたいが、しかし風田の恩がある。

リコリスは耐えた。

「聞かなかつたことにする。とにかく、お風田ありがとな、ライカ」

「……」

礼を述べれば、本をテーブルに置いたライカリスがリコリスに近づいてきた。

「リコさん」

静かに名前を呼んだ彼は、不安と期待の入り混じった、複雑で真剣な表情を浮かべていた。

「お願いがあります」

そんなに緊張するお願い事とはなんぞや。

緊張が伝染してきて、リコリスもじつと田の前の顔を見上げる。

「あの……、」

「う、うん」

「私、リコさんの牧場に引っ越したらダメでしょうか……」

・・・・・。

「え、いいよ？」

「えつ？」

何故そこ驚くのか。むしろ、こんなことでそんなに緊張してたのか。

気が抜けて、随分あつたりした返事になつた。

嫌だとは欠片も思わないし、リコリス自身も不思議なほど、ライカリスは一緒にいて違和感のない相手だ。
来たいと言つなら喜んで、である。もっと素直に言つならば、とても嬉しい。

ただし問題はある。

「あー、でも、そつか。ベッド……はここから持つて行くとしても、狭いしあ風呂もないし……」

誰かが壊した扉もないしな。

「お金貯まつたら増改築するし、それからの方が」

「お金なら出しますよ？ むしろ私が出すのが道理でしょう、この場合」

「いや、それがそうでもないっていうか」

「」の世界へ来て早々にリフォームは決めていたのだから、ライカ

リスにばかり、といひのはいかがなものか。

彼の部屋を造るとして、その部分を負担してもらひるのはありだと
は思うが。仮に折半だとしても、今のリコリスにはそれだけの所持
金もないのだから。

「全額負担するので一緒にいさせてください、って言った方が分か
りやすいですかね」

「なんだそれ……ちなみに引越し希望日はいつ?」

訊いてみれば、ライカリスはにっこり笑つて。

「今すぐにでも、心配しなくても、私結構持つてますし」

どれくらい、これくらいと、その金額を聞いて、リコリスは思わず男の首を絞めた。もちろん本気ではないが。

しかし土地を買つ前のリコリスより金持ちなNPCって、なんだ。

「サツイガワイタナー」

「そんな棒読みで……リコさんは牧場ごと引っ越しましたからねえ、
相当かかったでしょう。私は近くに越してきもられて嬉しかった
です、けど」

どうやらその直後に2年前の異変があつたらしい。

ライカリスの表情が悲しげに曇る。それを見て、リコリスは改めて理解した。

ああ、この男は、本当に不安なのだ。

ビームにも行くなと、隣にいてくれと言つた、あの顔を思い出す。

「はあ……。じゃあ、金銭問題は保留で。狭くて不自由満載でいい
なら、ついにおいで、ライカ」

「つー 嬉しいです。もつ本当に、床でも外でも牛小屋でも…」
「いや、それはもういい」

今度こそテーパンをお見舞いした。

引越しのものは実に簡単だった。

家にある物は好きに持つていいとライカリスは言ったが、
……本氣でいるない。

きっと大多数がリコリスの手に負える代物ではないから。
引っ越しといっても短い距離、後ほど本人に任せるのが一番いい
だろう。

部屋の隅にあつたベッドだけ、ぐわっと吸い込んで終了だ。

そうして、ライカリスの入浴の後、とても『機嫌な彼に行きと同
じく抱えられ、やつと牧場に帰ってきたのは午前2時だった。
しんとしている牧場。

烟を見ればきちんと種が蒔かれていて、しかし肝心の家妖精たち
がいない。

もしかして召喚に制限時間があるのだろうか。ゲームではなかっ
たが、と不安になったところで、ライカリスがリコリスを手招いた。

「リコさん」

静かな声で、指し示すのは家の中だ。

「あー」

覗き込んだ家の中、部屋の隅のリコリスのベッドの上に折り重な
るようにして、妖精たちが寝息を立てていた。

部屋に入れば明かりがついて、リコリスは少し焦ったが、妖精た

ちはよく寝入つているよつで欠片も起きる様子がない。

(可愛いけど、これ下の方潰れてない？)

狭いベッドに20人、いくら小さことはいえ、苦しそうだ。

「……ライカ」

小声で名を呼び、目線で問えば、ライカリスは苦笑して頷いた。リコリスは音をさせないように持つててきたベッドを取り出し、Hンドテーブルを移動させてから、彼女のベッドにぴったりとくつかけた。それから2人で、上方の妖精たちをそちらに移動させる。まだ狭いが……まあ許容範囲だろう。これ以上はどうしようもないし。

(結局床で寝ることになるんだなあ)

さつきのあればフラグだつたのか。

夏だし、風邪も引かないだろうから、別にいいのだけど。床に座つてベッドに背を預け、隣に並んで座つたライカリスを見れば、同じことを考えたのか、くすくすと笑っている。幸せそうで何よりだ。

ちょうどいい高さの肩に頭を預けて、リコリスが目を閉じると、しばらくして明かりが消えた。どういう仕組みになつているのかいまいち分からないが、今は考へても仕方ない。

何より、今日はもう寝るべきだ。

(だつて、きっと明日も辛いから)

大きな手が頭を撫でてくれるのを気持ちよく思いながら、リコリスは意識を手放した。

おれかの話ー パソコンタイの日記

オレサマの「プロジェクト」は、ボクジヨウをケイヒヤしてこるが、まだわからぬスメだ。

ある日のこと、「プロジェクト」はつまびおつて、ボクジヨウにたつていた。

カンペキなオレサマとしたことが、ナゼかそのヲクゼンのキオクがすりぬけていた。

されば「プロジェクト」もおなじのよひで、やたらとパソコンしていた。

おじっくは「わなばせ」といふ。

しばらくして、「プロジェクト」のマヌガやりてきた。

「プロジェクト」のことがだいすきなイヌだ。

ヤシは「プロジェクト」のためならしなるつていうて、「プロジェクト」がすれだ。

イヌは「プロジェクト」の「コグチ」をうつしにうつてくると、「プロジェクト」だもつて、なきだした。

アホだとおもひ。

アゲクに、『プロジェクト』や『プロジェクト』のナカマ、ボクジョウがセカイからきたとかいいだしゃがつた。

一ネンもたつてゐらじこで、オレサマたちがになくなつてから。

『プロジェクト』はイヌのセシメイをむずかしいカオできいていた。

そりゃねうだ。

それから。

しなびてたイヌをすこしやすませた『プロジェクト』は、マチにこへつてんでヤサイをショウカクした。

やつたのはほととぎすやせやべもだけどな。

オレサマもくわいへじだつてやつた。

マチにこつてからも、イロイロやつたぜ？

『プロジェクト』のヤサイをヒンコヨしておとしたジジイもセントクしてやつた。

オレサマはクウキよめのからな。

『プロジェクト』がたたかうのも、てだすけしてやれる。

さすがオレサマ。

ところで、イヌは「ジコウジンカクだとおもつ。

だが、オレサマにもよくわからん」ともある。

それは、「シミュジン」とイヌのカンケイだ。

マヒからおもつていたが、おまえらなんなんだ。

なんでそれで「トイドアード・ワシ」じゃないのか、「トイチジカン」といつめてやりたいわ。

ナカよくテとかつがさやがつて、おまえらがれトイドアードながだる。

おまえらまじなんなの。

たのむかひ、やつやとくつば。

それができんなら、やこへなおれ。

オレサマがセツキヲウしてくれる。

それがダメならせめてシツコリこれがせてくれ。

……あ。

「コトバをはなせたら、ラクなのになあ。

第1-1話 新たな一日と生活の始まり

意識が浮上した。ぱち、とやけになまつきり目が開いて、おかしいなと彼女は思つ。

(……こんなに寝起きよかつたっけ?)

まだ若干霞みがかつてゐる頭で、もつ少し寝ていたいと思い、いやもう時間だ、働くなれば、と考える自分がいる。

(働く? だつて私の仕事は)

さつと頭の中の霞が晴れた。眠りの余韻が遠のいて、室内の光景が意識の内に入つてくる。

外はもう夜ではない。完全に明けたわけではなく、しかし太陽が顔を見せる前の、夜と朝の間の時間。

彼女『リコリスト』の一番好きな時間帯だつた。

時刻を確認した。午前5時5分。

本来のリコリストなら、田舎ましもなくこの時間に目が覚めることはない。彼女の仕事は時間で拘束されるものではなかつたから。

昨日が色々ありすぎたからか……あるいは、リコリストは考え、思考をやめた。

彼女の推測は、明日明後日、そしてそれから先と、朝を迎えないれば検証もできない。

(起きよつ……)

牧場を見にいかなければ。

とりあえず畠の様子を見たかった。

この世界の作物の成長スピードを把握しておくためだ。ゲームと同様ならその全てのデータを彼女は記憶しているし、飢えることもないだろうが、そうでないなら計画を立てる必要がある。

そして、動物たち。

昨日の夜、戻ってきた時には牧草地に動物たちの姿はなかつた。日が暮れて妖精たちが小屋に帰してくれたのだろう。彼らをまた外出さないと。

それから朝ごはんを用意して…… そういうえば後ろでまだ寝息を立てている妖精たちは、花の蜜が主食らしい。少なくともゲームの中では。

それならば所持品の中に何種類も大量に入っているはずだが、本当に人間と同じものを用意しなくていいのだろうか。

その後は、また町だ。

妖精たちに留守を頼んでばかりで心苦しいが、約束もあるし、今日は早く帰つてくるということで見逃してもらおう。

昨日に引き続き、結構な過密スケジュールだ。

「……リコさん、起きてます?」

すぐ近くで声がした。

「うん。 おはよう、ライカ」

「おはよひじやこます」

昨夜、ぴつたりとくつついて眠つたパートナー兼同居人は、リコリストが起きたのを察して、静かに声をかけてきた。

多分無理だとは分かつていてが、リコリストとしてはもう少し寝させてあげたかった。何せ、就寝時刻が2時過ぎだったのだから。

「私起きるけど……ライカまだ寝てる、寝てもいいよ」

「むしろ寝てくれ。」

無駄だと知りつつも、念を込めて提案する。

「いえ、お仕事でしょ？ 手伝わせてください」

言いながら、ライカリスはちらり、と妖精たちを見た。
ぐっすり眠っている。これを起さにして手伝いを、と要求できるか

？ それは絶対無理。

「じゃあ、お願ひしようかな」

今日もっと早く就寝して、しっかり休めるようにした方が、これ
以上頑なに断るよりも建設的だ。

そう判断したリコリスは、ライカリスと共にそっと家を出た。

午前8時半。

リコリスたちは寝坊したと慌てて起きてきた妖精たちに牧場を任せ、町に出ていた。

ちなみに妖精たちの朝ごはんは、花の蜜で間違つていなかつた。
一番人気で取り合いになつたのはラベンダーの花の蜜だつた。

「酒場に行くんじゃないんですか？」

ライカリスが不思議そうに聞いてくる。
リコリスが迷わず進むのは、酒場への道ではない。

「行くよー？ でも準備も大事でしょ」

昨日、男たちを捕獲したときから考えていた。

考えたはいいが、それはある人物の了承を得なれば進まない。
最初真っ直ぐに酒場に向かうつもりだったリコリスは、思い直して
まず先方に頭を下げに行くことにしたのだ。

見えてきたのは、トンテンカンと音を響かせている、小さな作業
場だった。

リコリスは入り口から中を覗き込んだ。

「すみません。サイプレスさんいますかー？」

午前9時。

「うわあ……」

酒場に着いて、マスターに挨拶したリコリスは、今日町に出た本
来の目的に向き合つて、うつかり妙な声を出していた。自分でやつ
ておいてこの反応はどうかと彼女は思ったが、出でしまったものは
仕方がない。

まだ開店前の酒場の隅に、昨日の7人はいた。その様子は……筆
舌に頃くしがたい。

一言で言つなれば、憔悴、だろうか。

全員既に押さえられずとも床にべつたりと倒れ伏し、弛緩した体が時折痙攣していた。

「あ、あ、あんた……じぶ、自分で、やらせ、たくせ、に……」

男の1人が顎を床に擦りながらリコリスを見上げ、そこまで言ってまた力尽きた。

ライカリスがそんな男を冷たく見下ろす。

「はっ。それだけ言えるなら十分元気じゃないですか。なんなら、私がトドメ入れましょうか？」

吐かれた毒に、全員の肩がびくりと揺れた。どうやら皆意識はあるようだ。

そんなライカリスの肩を軽く叩いて、リコリスは怯えている彼らを見つめる。

どういうわけかHPが半分ほど減っていた。

【スキル選択】

ヒーリングサークル
【回復陣】

【スキル発動】

7人の下の床に、大きな魔法陣が現れた。白い輝きを放つそれは、
ブリストル神官の回復スキルのひとつだ。

パーティを組まなくとも、指定した範囲で複数人を癒すことがで

かる。

観察していると、魔方陣から放たれた光は7人に柔らかく纏わりついて輝きを増し、それからゆっくり弱まって消えていった。

全員、HPが最大まで回復しているのを見て、リコリスはほっとする。

怪我をしていたわけではないので、何を治したのかいまいち分からなかつたが。

そろりそろりと頭を上げる7人を、リコリスは腕組みして見下した。

「じゃあ、皆さん。回復したところで……何か言つことは?」

問われた7人は、仲が悪かつたのも忘れたのか、顔をつき合させて会話を始めた。

依然として、床に這いつくばったままで。

「な、何か? 何かつてなんだと思う?」

「なんでしょう……全然分かりませんわ……」

「謎かけでしょうか? 何か別に意図があるのでは……」

「俺頭悪いからよ……」

(え、そんな悩むこと?)

リコリスは頭を抱えた。

彼女の後ろでは、ライカリスは蔑るように7人を見ているし、エフススは笑いを堪える表情で口をパクパクさせている。「悪いことした時に言つ言葉だろ!」と。

ヒントに気づかないまましばらく相談していたが、ようやく男が1人、エフススを見た。

「　　はつ！」

それは一瞬で全員に伝わって、目を見交わした彼らはリコリストの方へ体を向けた。

無論這つたまなので、額は床についたままだ。変な光景だが、見よしによつては土下座に見えなくもない。

『せーの……ごめんなさい…』

「これはきっと進歩なのだろう。意外と素直で、これからリコリストがやろうとしていることにも希望が持てる。

「……反省した？」

ツツコミ入れたいと、つづりする心を無理やり抑えつけて、リコリストは問う。

「町の人に乱暴を……直接的な暴力じゃなくても、脅したりとか、お金で圧力かけたりとか、もうしないって約束できる？」

具体的に言えば、うんうんと頷きが返ってきた。
では、これで第一段階終了だ。

「じゃあ、あなたたちの「これからのことだけ」

言えば、全員の背が強張った。

一晩中整体と、撲り刑はそんなに堪えたのだろうか。

そんなことを考えながら、リコリストはふと、ひとつ重要なことを

思い出した。

「 ああ、その前に、皆で血口紹介しようつか」

リコリスは彼らの名前を知っている。ペオニアを始めとして、全員確認済みだ。

だが、人間関係の始まりには、まずそこから、お互いを知ることが必要だ。

彼女は床に正座し、7人に向き合つた。

「 では改めて。リコリスです。町の南で、牧場やつてます」

リコリスがそうして軽く頭を下げれば、ひどく困惑した視線の後、そもそもと体を起こす音が聞こえたと思つたら、全員が彼女を真似てか正座していた。

代表して、まずペオニアが深々と頭を下げた。

「 ペオニア・バークマンと申します。この度は大変ご迷惑をおかけ致しました」

ペオニアの護衛たちがそれに続き、最後は男たちが慣れない仕草ながら謝つてきた。

彼らの名前は護衛側がアイリス、ジョンシャン、ジニア。姓は皆セルベアで姉妹なのだという。

男たちはチエスナット、ファー、ウイロウと名乗つた。

「 よし。じゃあ本題に入るよ。まずチエスナット、ファー、ウイロウ！」

『 はい。』

あえて呼び捨てにしたが、特に不満はないようだ。いい返事が返つてきた。

「あなたたちには働いてもらいます！」

宣言すると、男たちはポカーンとした。何故。

まともに仕事をせずに食べ物をせびったり、森で木の実などを拾つて暮らしていたと聞いたから、まず働けというのはおかしいことではないはずだ。

腑に落ちないが、リコリスはとりあえず考えていた計画を口にした。

「まず朝一で私の牧場を手伝つて、それが終わつたらサイプレスさん この町の大工さんのところで働いてもらいます。これは先方にも了承いただいてます」

サイプレスは生産スキル伝道師の一人で、木工を担当していた。町の大工さんだ。

リコリスにも下心がないわけではないが、そもそも女性には預けられないし、体力もありそうだし、厳格で男たちよりも体格のいいサイプレスに頼むのが一番だろうと思ったのだ。

「夕方まで働いたら、牧場に帰つてもらつて、晩御飯の後は修行！」

『修行？！』

「そう修行。戦つてみた感じ、ちょっと心許なかつたから。もう少し強くなつてもらおうと思つて」

いすれは町を守れる立場になつてくれればいい。

スイエルの町には戦える人間がライカリス以外にいないから、レ

ベル持ちは貴重だ。

「あと、悪いけど給料はお金じゃなくて現物支給。食料毎日3食分調理済みで、おやつもほじほじには認めます。なんでお金じゃないのかって？　それは私が貪るだからです！」

指摘される前に言いつておく。

まあ世界的な食糧難だと云ひのゝ時世、リコリスの牧場の作物ならいにお値段のはずだから、悪くない条件……だと思いたい。

「……不憫」

誰かがボソリと言つた。リコリスは悲しくなつた。

チヨスナットが首を傾げる。

「でもよお。牧場主つてつたら、皆金持ちじゃねえのか？」

「……手持ち4桁ですか？」

「……おお……」

聞いた側が言葉を失つた。

大量のアイテムを所持しているリコリスだからなんとかなるが、

普通に暮らそうと思つたらどう考へてもアウトな所持金だ。

ライカリスがため息をついた。

「本来牧場は町のワープゲートの先にあるものなんですよ。リコさんはそこから、この町の南の土地を買って、牧場を移動させたんです。そうすることでスイエルの町の牧場として認められ、お互いに利益がありました」

「へえ～、そんなことできんのか」

「では、その土地代が高かつたのか？」

アイリスが問い合わせ、ライカリスが頷く。

「あの土地は、1兆Bでした」

Bはこの世界の通貨の単位で、バルと読む。予想外の単位に、7人全員が目を剥いた。

ちなみに0をつけ表記すると1,000,000,000,000Bとなる。眩暈がする金額だ。

リコリスはゲーム内でも有数の廃人だったが、そのリコリスが僕約に僕約を重ねて、必死で貯蓄しなければ稼げなかつた。

彼女の牧場レベルがカンストせず900で止まっているのは、キャラクターの成長や重要なクエスト、あるいはこの土地を買うために必要な条件以外の増改築をケチつたからだ。

土地を買うにしても、もう少し余分に貯金してから実行すればよかつたのに、と友人たちに散々言われたが、リコリスは今更ながらそれを痛感している。

「すつげえな……いろんな意味で
「でしょ？」

もういい。リコリスは開き直った。

「で？ どうする？ もちろん、他に働き口の希望があるなら、無理のない範囲で私が交渉してみるけど」

男たちは顔を見合させ、一拍。

『よろしく頼みます、師匠！』

「師匠？！」

予想外の呼ばれ方だった。

第1-2話 彼女の計画

「あ、あのっ」「ん？」

それまで黙つてリコリスたちのやり取りを見ていたペオニアが、唐突に声を上げた。

緊張の面持ちで見つめられ、リコリスがきょとんとする。

「わ、わたくしも、あなたの牧場で使って頂けません」と「…」

これには護衛たちも驚いたようだ。「お嬢様？！」と叫んだ声がひっくり返つていた。

リコリスは思わずまじまじと相手を眺めてしまつた。

こちらの4人はどうすれば上手く町に溶け込めるだろうかと悩んでいただけに、意外すぎて、けれど渡りに船もある。

「私はいいけど……いいの？」

肉体労働などやつたこともないだらうとすべに分かる、それほどに白く細い手を胸の前で組んで、リコリスに必死に頷いてみせる。

「はい！ わたくし……今までそういうことは経験がありませんけれど、精一杯勤めてみせますわ！」
「いや、あなたがそれでいいならいいんだけど」「では、わたくしのことばづりんか、ペオニア、と」

リコリスに真っ直ぐ向かう視線は、妙に熱心でキラキラしている。

(あれ、これつてもしかして懐かれた?)

「えーと、じゃあペオニア?」

「はい」

名を呼ぶだけでこうも嬉しそうにされると、リコリスとしても居た堪れないというか、照れくさいというか。

「これからよろしく」

「はいっ! よろしくお願ひいたします」

はにかんで返事をする姿は、昨夜会った時とは違つて随分幼い。些か不安だが、本人にやる気があることだし……裁縫や料理を教えてみてもいいかもしない。リコリスの選択した生産スキルだ。問題なく教えられる。

「……あー、アイリス、ジョンシャン、ジニア

もう開き直つて呼び捨てにすることにした。

守るべき主人がこの様子なら、真面目な性格らしい護衛3人も多く従つてくれるだろう。

呼ばれた3人は慌てて居住まいを正す。

「は、はい」

「皆で一緒のことやつても仕方ないから、仕事はある程度分散される。あなたたちは順番にペオニアの補佐を、つて言つても護衛の立場もあるだらうし、そんなにバラバラにはしないから。夜にはこつちの3人と一緒に修行してもらつね」

「分かりました」

なんとかまつた、のか。リコリスは息をついて立ち上がった。

(細かいことは後かなあ。とりあえず牧場に戻つて、それから)

いつまでもここを占拠するのは迷惑だ。酒場は畠は食堂だが、なんにせよ営業開始時間がそろそろだ。

「マスター、とりあえずこんな感じになつたん」

「おう。なんつーか、相変わらず面倒見いいなリコリス」

「……どうでしょうねえ」

Hフススが言つのはゲーム中、無数のクエストで住人たちを助けたことだろうか。それは正確にはリコリスであつて、そうでない。これを考え始めるところの世界でのほとんどの関係が成り立たなくなるので、彼女は努めて考えないようにしている。

その関係こそが、今この世界にいる『リコリス』を支える全て、なのだから。

「まあ、あとの細かいことは、牧場に戻つてからにします。場所貸してくれて助かりました。ありがとうございます」

「いってことよ。つーか俺あ何もしてないしな！」

改めて礼を述べれば、豪快に笑い飛ばされた。さすがだ。
感動を覚えつつ、リコリスは弟子たちを振り返る。

「んじや、皆移動するよ。立てる？」

『.....』

促すが、正座したままの彼らは動かない。

これは、アレか。お約束の。

「えー……足、つついでいい?」

『やめてください、お願ひします……』

もう息ぴったりである。

それから5分後、リコリスたちはようやく酒場を出た。
ぞろぞろと新しい仲間たちを引き連れて、リコリスはライカリス
と並んで歩く。

後ろの面子は、それまで仲が悪かったことも忘れたように向やら
楽しそうにしているが、隣の男は何も言わない。

先ほどリコリスの所持金の話が出たときにフォローをしたきりで、
それ以降はずっとだんまりだ。

機嫌は最悪。それが手に取るように分かるが、何も言わないのだ。
リコリスはため息をつく。

昨日、今日のように、これからもリコリスについて歩くだけでも、
この人嫌いにはさぞ辛いだろうに。それでも彼は町に行くこと、人
に会うことそれ自体には文句のひとつもつけなかつた。
今も、ただ黙つてリコリスの隣にいる。

(うーん。せめて事前に説明しておけばよかつた)

これでこの人数が牧場に入つてくるとなれば、機嫌が上向くこと
などなくなりそうだ。

こうと決めて突つ走つて……あまりにも配慮が足りなかつた。蔑
ろこしてはいけないと思つた。

「 リンさん、私のことなら別に」

静かな声に、ギクリとリコリスは肩を揺らす。

彼女が恐る恐る隣を仰げば、感情の隠れた瞳が見下ろしてくれる。

「顔に書いてあります。気まずい、どうしようって」

「指摘されますます気まずいわ」

「それは申し訳ない」

しつと言われて、リコリスは俯いた。

「勝手に決めちゃってごめん、ライカ」

自爆した挙句本人に気を遣われるなど、なんて情けない。
ライカリスが大きくため息をついた。

「大丈夫です。あなたの考えてることなんて、大体分かりますから。
だから反対しなかったでしょう？ まあ、諸手を上げて賛成という
わけにはいきませんが、」

そこで一呼吸置いて、彼は続けた。

「……いいんです、本当に。私はただ、あなたの リンの隣にい
られれば、それでいい」

だからずつと一緒に、と微笑んで。

「……」

聞きようによつては凄い口説き文句だが、そこに全く他意がない

のが分かるので、リコリスは複雑だ。

ただ共にいられることだけを考えて、それ以外もそれ以上も望まず、嫌なことすら飲みこんで。

一緒にいたいとまっすぐに向けられる想いは嬉しく、何も望まれないのは寂しくて悲しい。

理由は分かつていてる。けれど。

(もつと我慢言つてほしina)

引っ越しの件はノーカンだ。これは唯一の願いに付随するものなのだから。

(……いや、我慢言つて私都合だし。そうじやなくて、もつともつと喜ばせてあげられたら)

「リコさん？」

黙りこんだりコリスを、ライカリスが不安そうに伺う。きっと返事をしなかつたから。

「……あのさ、ライカ。私だつて」

「（）主人さまあ、ライカさまあ！ おかえりなさいなのですよ！」

いつの間にか牧場に戻つてきていたらしい。

言いかけたりコリスの言葉を遮つて、妖精たちが彼らを出迎えた。

「あ、はい、ただいま。何もありませんでしたか？」

ライカリスがしゃがみ、妖精に話しかけている後ろでは、ペオニアたち女性陣が頬を染めて目をキラキラさせていてる。

家妖精の魅了スキルはハンパない。

「あれえ。お密さまですか？」

「お密さま？」

「お密さまだつて！」

「はじめてなのです！」

妖精たちに取り囮まれるに至つては、既に氣絶しそうになつている。

逆に弟子たちはどう接していいのか、とおもおもしているのが対照的だ。

「はい、紹介するよー。今日からここ の従業員になった 」

とりあえず自己紹介でもしてもらひことにした。

妖精たちは人懐こいし、積極的だから、放つておいても話は進むし、勝手に親交を深めてくれるだろう。脱線する可能性は高いが。そう思つて観察していると、やはりどんどん話が展開していく。もちろん脱線も含めてだ。

そこでふと、妖精のひとりが言つた。

「あ、皆さまは牧場に住むのですか？」

『え？』

人間たちが意外なことを訊かれた、と言つ顔をする。

揃つて首を傾げ、示し合させたかのようにリコリストを見る。

7人分の目が、どうすればいいですかと問い合わせてきて、リコリストは困つたように微笑んだ。

「今は無理だなあ。部屋も家具もないし。あなたたち、今どこに住んでるの？」

逆に言えば、弟子たちは町外れの小屋を勝手に占拠しているらしい、ペオニアたちは町の北の空いていた屋敷を買い取ったのだと言う。

不法占拠組はともかく、町の北からここまで通うのは結構骨かもしれない。

「えー、じゃあ、ちょっと目標決めようか」

ぴつと人差し指を立てたリコリスに、全員がきょとんとした。

「まずペオニア。料理と裁縫教えるから、覚えて。あと、薬草とかの扱いを、一緒にライカに習おう」

「はい……つて、え？」

途中までで頷きかけ、ペオリアが目を丸くする。困惑の視線がリコリスとライカリスを行き来したが、リコリスは涼しい顔で、ライカリスは肩を竦めるのみ。

結局、頷いておく他なかつた。

「次、アイリス、ジョンシャン、ジニア。せつきも言つたとおり、1人ずつ順番にペオニアについて、あの2人は妖精たちと一緒に牧場の仕事メインでよろしく」

『はい』

「後でまだ野菜も動物も種類増やす気だから、慣れておいてくれると嬉しい」

「分かりました。お金が貯まつたらですね」

「…………う、うん」

アイリスに言われて、リコリスは顔を引き攣らせた。
ああもう、よく理解していらっしゃる。

「えー、チコスナット、ファー、ウイロウ」

『へい!』

「あなたたちには、家建ててもうります」

『…………え?』

ぽかんと3人の口が開く。

「建てるつていうか、建て増しつていうか。規模が規模だけにもう新築でもいいんだけど」

「え、俺ら3人つスか?」

「もちろん人手は提供します。私だって手伝つし」

それを聞いて、ライカリスが顔に手を当て、盛大なため息をついた。

「…………リコさんにやらせるくらいなら私がやります」

「一緒にやればいいでしょ? とにかく、サイプレスさんのところで働かせてもらえることになつたし、最初は見習い下つ端扱いだとは思うんだけど、いずれ技を磨いてもらつて、ね?」

「ね? つて……師匠、リフォーム代浮かせる気でしょ?」

「そうとも言ひ」

隠しても仕方がないので、リコリスは正直に肯定した。

「すげえ正直」

「誤魔化しようがないんだもん。貧乏だし」

そもそも最初から考えていたことだ。そして包み隠さず話すつもりだった。

「あのね、あなたたちの部屋と、ペオニアたちの部屋と、それにお風呂とね」

「え、俺らの部屋もあるんスか」

「いらない？」

弟子たちが3人で大きく首を振る。

『ほしいッス!』

心底嬉しそうに、声を揃えた。

相当先のことになるだろうし、細かく決めるのはまだまだ早いが、楽しみがあればやる気も違うだろ。問

題があれば、後で正せばいい。

「個室でも大部屋でも好きにしていいよ。ペオニアたちの意見も聞いてあげてね」

「師匠の部屋はどうするんスか?」

「もちろんお願い。2人部屋よろしく…」「え」

隣で意外そうな声が上がる。

リ「リストがそちらを見ると、問い合わせる視線とぶつかった。

「あれ、嫌だった? えと、ライカと私、同じ部屋……とか」

また突っ走ってしまったのか。

できるかぎり一緒に、そしてその時間を大事にするなら、相部屋にした方がいいとリコリスは思ったのだ。駄目だつただろうか。ライカリスが目を瞬く。浮かんだ微笑は困惑気味だった。

「嫌だなんて……むしろリコさんはそれでいいのかと」「いいよ。なんで? 一緒にいたいし」

『…………』

全員が沈黙した。

(あつれー? 私何か間違えた?)

「ゴホン!」

わざとらしい咳払いはアイリスだった。
それで全員が我に返ると、ちらちらと皿を見交わして……一步下がる。

「ん?」

リコリスが戸惑つづつに更にもう一歩離れて、男たちは妖精たちを肩に乗せた。

「おーい」「えー、おー一方は、もう少し話しかけられた方がよろしいかと。我々はこの小さき先輩方に牧場を案内していただきますので、どうぞごゆっくり」「は?」

言つなり、全員が脱兎の如く駆け出した。

妖精たちがキャキャと喜ぶ声があつて、リコリスはライカリスと2人その場に残される。

「……」

とりあえず、ペオニアのドレス捌きは見事だった。

展開についていけない彼女の頭は、そんなことを暢気に考えてしまった。

第13話 館を張る人、喧嘩を賣う人（前書き）

お、お気に入りが200件超えました。
嬉しいです。ありがとうございます。ありがとうございます。

第1-3話 養を張る人、喧嘩を買う人

後は若いお二人で！　みたいなこの状況は何事だ。

弟子たちの姿は既に遠く、今は牛と戯れているのが見える。

（あ、ファーツてば、牛の前に膝なんかついたら……あーあーあー、
筆られちゃったよ。ドンマイ髪の毛）

悲痛な悲鳴が微かに聞こえ、それを見て笑い転げる妖精たちの声
も遅れて届いた。

平和だ。彼らも、現実逃避中のリコリスの思考も。

「えーと」

別にここまで気まずくなるような流れではなかつたはずなのに、
声をかけづらいのは何故。皆の反応のせいか。
否、きっと。

「ごめん、ライカ」

「え、何がですか？」

ライカリスがきょとんとする。

「いや、その」

（あえて言つなら、私の空回りつぱりが「メンナサイだけど）

ライカリス相手だと、どうにも上手くいかない。弟子たちにやつ
たように力押しで何とかできたらどんなにいいか。

気負いすぎ？でも、どうしたらいいのか分からない。

その感情を上手に言葉にできずに口を噤んだりコリスを、ライカラスが覗き込んだ。

「つ」さん？あの」

リコリスの表情を確認して、眉根を寄せた。

「リコ。私はさつきの、嬉しかったですよ？」

「いや、そんな困った顔で言われても」

「いえ、本当に。本当に、とても嬉しかった。でも、あなたはそれでいいんですか？」

「質問の意味がさっぱり分からない」

「いいと言つたではないか。しかもかなりはつきりと。」

ライカリスがうーん、と唸つて頬を搔く。

「あなたの生活空間に、そこまで私を入れてしまつていいのかと。随分簡単に決めてしまつたように見えたので……。他人が常に同じ部屋で一緒に生活するというのは、慣れるまで結構大変ですよ？」

「引っ越してきてそれって、矛盾しない？」

遠回しに同じ部屋なんて嫌だと言われているような

「だから、最初に床でも外でも牛小屋でもつて言つたでしょ？あなたの生活ができる限り尊重するための距離を保つておこうと思つていたんです。それなのに」

ライカリスがため息混じりに首を振る。

「私は、あなたと一緒にいたい。隣に置いてもらひえるだけ、それでいいとか、そんなことを言つていても、結局は……。あなたがそれを許してしまつたら、私はきっともつと我慢になります。 例えばね。さつきの話、あなたが後でなかつたことに対すると言つても、そんなこと許さない、と言つてしまひドショウ」

静かに心情を吐露する言葉にて、リコリスはじわじわと落ち着かな
い心地になつてくる。

先ほどの気まずさとは全く違つ。心が跳ねる。

口元が勝手ににやけよつとして、それを我慢したら体がそわそわ
した。

「～～～～つでりや！」

顔を覗き込まれているのが恥ずかしくなつて、リコリスは思わず
目の前の顔の上半分を両手で塞いだ。
ちょっと勢い余つたかもしれない。

「わつ、ちょっと、リコさん何を
「撤回なんてしない！」

退かせつてライカリスの手が動くのを、遮るよつて叫ぶ。

「無理もしない。あんたの我慢なんか、全然平氣だから。だから…
…ライカと一緒にいる。私だって、最初にそつ言つた。約束したで
しょ」

一緒にいたいと願うのは、ライカリスだけではない。

「 そんなこと言つたら、本当に本気にしますよ」

「いいよ。ていうかしら」

さつぱつはつさり断言すれば、ぐい、と手を外されて、真剣な眼差しが下りてくる。

「前言撤回は認めません。遠慮なく一緒にいたせてもらいますし、いてもらこます」「望むところ！」

力強い宣言。

それを聞いて、ライカリスは不意に口を歪めた。いつになく意地悪な笑みを浮かべて、後ろを振り返る。牧場北の入り口の、その脇にある倉庫に向かって。

「　皆さん聞きましたね？」
「えつ」

一拍後、倉庫の影から人と妖精が転がり出てきて、リコリスの顔が盛大に引き攣った。

どこまでお約束なのかと。

「よかつたですね、リコさん。証人がこんなにたくさん」

(うわあ……)

リコリスに対してはやたらと対応が柔らかいので忘れていた。

他者を睨にかけることにおいては絶対に手を抜かない、この男の性格の悪さを。

リコリスの提案を聞いてから、どうすればそれが間違いなく約束されるか、考えたのだろう。多少本音を見せたとしても、それすら

も全部計算だ。

念入りに念入りに、相手に気がつかれないよう追い詰め、仕留める。そういう奴だった。

「チコスナットさん、ファーサン、ウイロウさん」

『へ、へいつ』

3人がびくつと体を揺らす。

「あなたたちは私が鍛えてあげましょう。大工修行で、簡単に音を上げないくらいに、ね」

『……つ？！』

危険な笑みだ。

免疫のない人間たちは震え上がり、妖精たちは蜘蛛の子を散らすように逃げていき、リコリスは頭を抱えた。

「はあ……」

まあ、これもある意味では歩み寄りかもしれない。ライカリスが他者の存在を認めることが自体が珍しいので、逆にいいこと、かも。ライカリスが楽しそうに嬉しそうに微笑んでいる。

それはリコリスが望んだことで、これはこれで、と彼女は思い直した。

名指しされた3人が真っ青で今にも気絶しそうなのは、同情しつつ華麗に見て見ぬフリで。

(ああ、でも。やられっぱなしは嫌だなあ)

性に合わない。喜んでくれるのは嬉しいが、それはそれこれはこ

れ。

リコリストはいじめられている弟子たちを眺めた。

「 3人とも、頑張ってね。ライカが鍛えてくれるなら、体力もつくだろ？」、ずっと早く家が建てられるようになるかもね？」

リコリストの追い討ちに、3人は涙目になる。まず、これは覗き見犯へのお仕置きだ。
そして次が本命。

「早い方がいいよねえ。ライカつてば不安になつたら泣いちゃむぐつ」

最後まで言えなかつた。

横から伸びてくる手が早かつた。少し距離を置いておけばよかつたか。

目を丸くした弟子たちが、困惑してリコリストたちを見つめる。中断はされたが、何を言いかけたのかは伝わつたようで、しかし信じ難いのか、アイリストがそんなまさか、と呟いたのが聞こえた。

「リ、リコさん。それは忘れてください……こつ」

耳元で囁く声は無視。

ちょうどいい位置に来た鳩尾に肘を入れると、呻き声と共に、口を塞いでいた手が外れた。
続ける声が大きいのは、もちろんわざと。

「えー、無理だなあ。昨日の今日だし、インパクトがありすぎだつたもん。だつてライカがな 」

「あああ、もう、すみませんでした！ 謝りますから」

「謝りますから」

よし。勝った。

勝ち誇った笑みを向けてやれば、ライカリスはへによと匂尻を下げた。耳と目元が赤い。

「ふふん。喧嘩売られたら買つちゃうよ？」

「はは……そうですね、そういう人でした……」

ライカリスは鳩尾を摩りながら苦笑した。

その顔から、ふいと視線を逸らして、リコリスは小さく付け加える。

「可愛いい我倣くらいいくらでも聞いてあげるけどねっ」

そして、何か言われる前にぱんぱんと手を打ち鳴らした。
呆けていた弟子たちが、慌てて背筋を伸ばす。

「田標も定まつたことだし、皆お昼にするよー。ライカ、ペオニア、
手伝つて」

「はい」

「は、はい！」

「他は……とりあえず邪魔しないでクダサイ」

弟子たちの肩ががくつと下がった。

「なんて、それは冗談だけど。ま、早く牧場に慣れてほしいし、色々見学しててよ」

笑いながら指示を飛ばすと、いつの間にか戻ってきていた妖精が、弟子たちの後ろから顔を出した。

出番？ 出番？ と訴える田に、リコリスは頷く。

途端、「一緒にお仕事するのですー」と誰かが声を上げ、他の妖精たちもそれに倣つた。さやあきやあと人間たちにまとわりついて、煙に引っ張ろうとする。

うつかり転んで踏み潰したら怖いと思つたのか、男たちがそんな妖精を順番に肩に乗せていった。

20人もいるので頭と腕まで占領されているが、見ている分には微笑ましかつた。

妖精たちはそれで更に喜びの声を上げ、女たちはそれを見てうつとりとしている。

一方は粗野で乱暴で、もう一方は偉そうで、と最初に受けた印象が大分薄れたのは、リコリスのお仕置きによるものか、あるいは彼らの元々の性格なのか。もしくは単なる妖精パワーか。

上手くやつていけそうなことにほつとしつつ、リコリスはライカラスとペオニアを従えて家に入る。

「何故扉がないんですね？」

本来扉があるべき場所をぐぐつて、ペオニアが首を傾げた。

「あー……」

「壊れたんですよ」

詳しい説明は一切なしで、ライカリスがしれつとのたまつた。

(壊した、の間違いでしうがつ)

しかし説明しにくいので、リコリスは心の中だけでつむこむ。それを読んだようにライカリスがリコリスの後ろ髪をつん、と引つ張つた。言うな、と。

「Jの短時間で空氣を読むスキルの経験値が相当積まれたのか、ペオニアは「そうですか」と静かに言い、何も訊いてこない。

「さつて、何を作らうかなー」

扉のことはスルーして、リコリスは腕まくりをした。
人数も多いし、ペオニアもいるし、お腹はすいたし、簡単なもの
がいいだろう。

そもそもこの家のテープルでは人数的に無理だから、外の牧草地
にでも行こうか。ピクニック気分で、お弁当を用意して。
レシピを確認して、リコリスは心なしか緊張の面持ちでいるペオ
ニアを見た。

「そんな顔しなくて、いきなり難しいことなんてさせないから」

苦笑いしながら宥めれば、少しだけ肩の力が抜けたようだ。

「は、はい。よろしくお願ひ致します」

「うん、よろしく。じゃあ、外で食べられるメニューにするから、
まずは」

(んん、こうこうお料理タイムも楽しいな)

一生懸命なペオニアの様子に、リコリスの顔が自然に笑顔になつ
た。

ちなみにその直後。

例の棚を予備知識なしに開けたペオニアが悲鳴を上げたり、護衛
たちが血相変えて戻つてきたり、というハプニングがあつたりして。
意外とうつかりしているリコリスなのだつた。

第13話 養を張る人、喧嘩を買う人（後書き）

牛に髪云々は実話です。
むしろ食われました。

第14話 入り乱れ飛び交う疑問

「一体、あの棚はどうなっているんです?」

オレンジブロッサムティーにゅうくり口をつけながら、ペオニアが問うた。

その向こう側では、男たちがせつせつサンドイッチを口に詰め込んでいる。

結構な量を作ったはずだが、既に半分ほど姿を消していた。そして男たちの頬は丸い。ハムスターか。

「んー、どうって言われても見ての通り。最初からあれだし……」

訊かれても分からない。持ち主なのだから尋ねられるのは当たり前だが、最初見た時ショックを受けたのはリコリスとて同じなのだ。

「そのうち入つて見学でもしてみるかなあ」

ポツリと呟けば、女たちの顔が強張り、ライカリスが半眼でリスクを睨む。

「絶対に単独行動に走らないように」

「わたくしからもお願ひ致しますわ。戻つてこられなかつたら大変なことですもの」

「リコリス様がお強いのは知っていますが、安易に未知の場所に踏み込むべきではないと思います」

「見るからに不穏な場所でしたからねえ。入り口も高すぎて下の様子が伺えませんでしたし、確実に戻る手段を考えときませんと」

「その前に落ちたら怪我では済みませんね、あの高さ……」

日々に諭され、きわめつけは食べる」と一生涯命だったはずの、弟子たちの言葉だ。

「ライカリスさんが祟りそうな顔で追いかけるんじゃないですか」

「で、とつ捕まって死ぬほど説教されて」

「その後は…………お仕置き…………？」

(こつらよく見てる……といつかシャレにならんつ)

関係をよく理解した上での発言だ。それが弟子たちから出てくるというのは正直予想外だったが。

ライカリスが眉を跳ね上げたが、不機嫌そうでも否定しないところを見ると、彼もあり得ると思つたのか。

リコリスも想像してみて……想像したこと後悔した。げんなりして首を振る。

「絶対やらない……」

むしろ忘れたい。

行くなら一緒に行けばいいだけのことだが、うつかり想像してしまった内容に精神を削られた。忘れない。

ペオニアやジニアなどは、何を思い浮かべたのか、青くなったり赤くなったりしている。……本当に何を想像したのだか。

振り払つように今度は大きく首を振つて、リコリスは牛乳を飲み干した。

「よし。忘れた」

「…………無理がないですか、リコリス様」

アイリスがつっこんできたがリコリスは聞こえないフリをした。

「とりあえず、棚のことは置いておこう。いや、ホントに本氣で。それより明日のことなんだけれど」

苦しい話題の逸らし方だと、リコリスとて自覚はある。だがもう、誰も指摘はしなかった。

「牧場つて朝それなりに早いから、どうよつかと思つて。ちなみに5時起きなんだけど」

「5時……」

弟子たちの顔が微妙に暗くなる。

正直なところ、明日も今朝と同じ時間に目覚めるのかリコリスにも疑問なのだが、今日作業をしてみた感じでは、やはり5時起きが妥当だろう。

大体いつも決まった時間帯で水と肥料を与えなければならなかつたゲームの仕様を、この世界の作物はきつちりと引き継いでいるようだった。

ゲーム時間での朝夕6～7時に水と肥料を撒き、昼の1～3時間にランダムで生えてくる雑草と抜く。朝5～6時、夜8～9時各1時間で時折現れる害虫にも対処しなければならないのだ。

動物たちにも1頭1頭愛情を注ぎ、花壇の花には水を遣り……とやることたくさんある。

特に妖精たちがオネムな早朝は忙しい。

だが、ゲームの仕様に基づいているだけいいのだろうと、リコリスは思う。

これで実際の牧場での仕事を、となつていたら、どう考へても対

処できなかつた。

だから、まだマシなのだ。

現れた害虫がゲームのままの、ぶよぶよ太った人面芋虫で、それを潰すと中からランダムで、カサカサと素早く動く黒いヤツが出てきたり出てこなかつたりする仕様まで見事に引き継いでいたとしても、我慢……しよう。

（あれはホントに叫ぶかと思つた……それでなくとも芋虫の体液が
……「う」）

ゲーム中で表現されなかつたところは、実に自由に、ちょっと自重してほしいと思うほどに現実だ。リアル

紫色の芋虫からドパッと体液が溢れ、その中から時々出てくる寄生ゴ……リコリスとしても全力で遠慮したい。

だが避けでは通れなかつた。ライカリスがいたからだ。

ゲーム中では容赦なく害虫駆除をしていたのだから、躊躇えれば怪しまれてしまう。

リコリスが彼の『リコリス』とは少し違つた存在なのだと、知られたくない。

全力で隠し通すと決めてしまつた。リコリスは嘘をついたのだ。もし事が露見すればどうなるだろう。

ライカリスはどんな目でリコリスを見るだろう。

（こわい……）

先ほどの想像など生易しい。想像できない絶望が恐ろしい。

まだこの世界に来て、ライカリスに会つて2日目だといつのことの有り様は何なのだろう。

何故ここまで彼に 依存 を。

ゲームで共有した時間があるから？

確かにパートナーとなつたNPCには執着も独占欲もあつた。
実在しないNPCを、正直自分でもどうかと思うほど氣に入つて
いた自覚はある。

異常な状況で、彼の涙を見、縋られたから？

それは一種の吊り橋効果のよつな。

それだけでここまで離れがたく感じるものだらうか。
大袈裟な言い方をすれば、ライカリスがいなければ生きていけない
と思い詰めてしまうよつな感情。

それは本当に自分のものだらうか。 否、確かに己の感情である
と強く感じ、理解できるから、なお一層分からなくなる。
だが、その疑問以上に心に重いのは。

（私……私は、なんて自分本位な……）

こんな曖昧で中途半端な存在が、自分の都合でライカリスを騙し
ている。そしてそれをずっと続けるつもりでいる。

（でも、それをしてでも私は……ライカと一緒にいたい）

だから、ずっとこの感情と罪悪感を抱いていくしかない。
この想いがどこから来るものか分からなくても、ずっと。

「 師匠？」

「ほあつ？！」

訝しげなチエスナットの声に、リコリスは我に返った。妙な声を出した彼女を、全員が心配そうに見つめている。ただ、ライカリスの顔は見ることができなかつた。

「大丈夫ッスか？ 突然黙り込んでしまつて」

気遣わしげな声に、リコリスは首を振つた。

「あ、ごめん。ちょっと頭の中で計画立てちゃつてた」

思考の渦は唐突だ。特にゲームの仕様とこの現実の世界との違いなどを考えていると、うつかりはまり込みやすい。

慌てて誤魔化して、リコリスはなんでもないようになつてみせた。

「えつとね、野郎どもは朝5時起床で牧場に来て。ペオニアたちは5時だとまだちょっと暗いし、距離も少しあるみたいだから、8時集合ね」

「野郎どもつて……」

ウイロウが呟いたがスルー。

「……5時つて早いッスね」

「そうだね」

微妙な表情でいるファーは、だから？ と言わんばかりの笑顔で黙らせた。

『了解ッス、明日からよろしくお願ひします』

弟子たちは諦めの表情で頭を下げた。

ボソボソと「遅刻したらすんません」とかなんとか聞こえてきたが、最初のうちと時々くらいは許してあげようとなりコリスも思つ。もちろん休みも何日かおきに差し挟むつもりでいた。

「わたくしたちは、そんなに遅くてよろしいんですの？」

入れ替わるよろしくして尋ねてきたペオニアに、リコリスは頷く。最近はあまり治安がよくないといつし、女性ばかりを薄暗い中歩かせるのは不安だ。

ほとんどライカリスに追い出されたといつが、またタチの悪い人種が町に入り込んでこないとも限らない。

「朝ごはん作るの手伝つて。その後は、大工組と交代で牧場ね」夜も早めに帰した方がいいだろうな、ヒリコリスは考えつつ説明した。

「分かりましたわ。よろしくお願ひ致します」

ペオニアが答え深々と礼をとると、アイリストたちもそれに倣つた。

では今日はこんなものだらうか。
夕飯の時間までいてもらおうか、そういうればそろそろ雑草の時間だ。
妖精たちと一緒に草むしりでもしようか。

リコリスがそんなことを考えていると、

のつしのつしと人間たちに忍び寄る影が、ひとつ。

「……あ

リコリスが声を上げ、皆がその方向に目を向けようとし

もしやり。

それは、ファーが振り向き、後ろを確認する直前のあっけない出来事だった。

彼は間に合わなかつたのだ。

「ぎゃあああああああつ

野太い悲鳴が上がる。

両手で頭を押さえる大柄な男の後ろ、白と黒の巨大生物 つまり牛が、口に茶色の塊を咥えていた。

もつともつさと咀嚼されているそれは、当然ながらファーの髪だった。

『うわあ……』

ライカリス以外の、全員の心がひとつになつた。

何故気がつかなかつたのか。そして、何故またファーを狙つ。1日の間に2回も髪を剃られるとは……氣の毒すぎる。

「あー、えつと。私のサンディッシュあげるから……元氣出して！」

リコリスが涙目のファーの皿に手つかずだったサンディッシュを移せば、周囲もいそいそと残りの食料を皿の上に積んでいく。それを見てライカリスは肩を竦め、嫌そうなため息をついた。

「まったく……面倒ですが、後で短くなつた箇所に揃えてあげますよ。触りたくないですし、本当に面倒ですが」

やたらと面倒を強調した後に軽くひどいことを言つたものの、これはライカリスなりの同情だらうか。

（うーん、牛と相性悪いのかな？　いやむしろ氣に入られたってことかも）

自棄食いを始めたファーを眺めながら、リコリスは不安と期待を半々で感じていた。

そんな惨事のために、その場の空気が生温くなつた時だつた。

「リコリスッ！」

悲鳴にも似た呼びかけは、危機を知らせるに十分な緊迫感を孕んで。

驚き視線を向けた先にいたのは、髪を乱し、真っ青な顔をしたマザー・グレースだった。

「ま、町に妙な男がつ！　け、怪我人つ……！」

「つ！」

息を切らせながらの言葉が終わる前に、爆発音が聞こえた。町の方からだつた。

第15話 避けて通れない道（前書き）

温い残酷描写あり。

第15話 避けて通れない道

リコリスは咄嗟にスキルを放つた。

【戦闘妖精ビショップ召喚】

今までにない発動の早さだったが、それを気にしている暇などない。

花と共に現れた妖精に、リコリスは走り出しながら指示を飛ばす。

「ビショップ！ マザー・グレースをお願い！ ライカ！！」

「はい」

声はすぐ近くで聞こえた。

ふわ、とリコリスの体が掬い上げられ、抱きかかえられた、と認識する前に視界が大きくぶれた。

リコリスを抱えるライカリスを中心に冷たい風が渦を巻き、一瞬の後それが消えると、今度は呼吸を阻害するほどに強く風が吹きつけってきた。

認識できないほどに周囲の景色が流れ、2人の赤い髪がばさばさと靡く。

ライカリスの戦闘におけるメイン職業は暗殺者アサシン、副業は狩人ハンターだ。

近接、遠距離の違いはあるが、双方ともスピードを持ち味とする職で、防御はそこそこでも回避と命中率は他職の追随を許さない。そしてそれが発揮されるのは戦闘だけではない。フィールドなどの移動にも特化したスキルがあつた。

今ライカリスが発動した【風の祝福】は、暗殺者と狩人の組み合いで習得可能なスキルで、キャラクター本来の移動速度に%で上昇効果をつけ、職業レベルを上げていけば最終的には5倍の速度で移動が可能になるものだ。

ゲーム中、パーティを組んでいるパートナーNPCは独自のAIでスキルを発動させるが、プレイヤーの指示でのスキル使用も可能だった。

そのため、プレイヤーたちはよく対象に【しがみつく】アクション機能を使った上で【風の祝福】を発動させ、首にぶら下がって高速移動していた。

ちなみに最高で5倍速、といつても、そのままだと速すぎて操作不能なため、基本的にはスキルレベルを下げて使用される。リコリスト一度試したが、マウスでの方向転換と画面回転が全く間に合わず、凄い勢いで海に落ちた過去がある。

ライカリスがどれくらいのスキルレベルで発動したのかリコリストには分からなかつたが、遊園地のジエットコースターよりもずっと速い。

ゆっくり歩いてもそう遠くない距離を一瞬で飛び越えて、リコリストたちはスイエルの町に着いていた。

強い風に乾燥した目に涙が滲むが、それどころではない。さすがに町に入つてからライカリスはスピードを落としたが、それでも黒く立ち昇る煙はすぐ近くだった。

周囲を一瞬にして瓦礫に変えた凶刃が、鈍く光を放ちながら振り上げられた。

ヒース少年の視界の端に彼の父親の姿が映る。

今から行われようとしている凶行を止めようと必死で叫んでいるが、その足からは夥しい血が流れ、そして悲鳴のよくな声は目の前の男には何の影響も及ぼさない。

小刻みに震える彼の手足は抵抗にも逃亡にも役に立たず、否、仮に動いたとしても道が開けるとは思えなかつた。

「悪いなあ、少年。この町の人間は頑固みたいだからよ。とりあえず見せしめになつてくれや」

そう言つた男は、ヒースが見たこともないような服を着て、見たこともない顔で笑つていた。

高く掲げられていた巨大な剣が、次の瞬間、ヒースめがけて振り下ろされる。

どうすることもできずにきつく目を瞑つた彼は、心の中で名を呼んだ。父と母と、それから……。

赤く濡れた切つ先が少年の頭に迫り、

金属の擦れる音がその場に高く響いた。

「なつ？！」

驚愕の声と、何か硬いものが折れる音。驚いて見上げたヒースの目に、赤い髪が揺れた。

次いで認識できたのは、ヒースと男の間に割り込んだらしいその手に握られた、凝った意匠の黒い刃の短剣、翻った黒いコートの裾。

返された短剣が、剣を弾かれた衝撃で隙を作った男の顔を大きく真横に抉る。

よろめき、血の噴き出した顔を押さえようとした男の手ごと、ブーツの踵が勢いよく蹴り飛ばして、何かが碎けるような鈍い音がした。

それは瞬きひとつ間のこと。

回し蹴りを入れた体勢から、素早く隙のない構えで立つたその高い背を、ヒースは呆然と見た。

「ライカ兄ちや……」

応える声はなかつたが、代わりに温かい風が吹いた。

ぽんつ、ぽんつ、と何かが柔らかく弾けるような音と共に、周囲に花が咲いていく。

半透明のそれを、ヒースは知っていた。この町の人間なら、きっと皆知っている。

「リコ姉ちゃん……っ！」

震える小さな背に、細い腕が伸ばされた。

優しく抱きしめてくれたのは、ヒースが呼んだ人。

「ん、もう大丈夫だよ、ヒース」

その声はヒースを安心させるのに十分なほど優しかつたが、抱きこまれた胸の中から彼が見上げたりコリスの表情は、いつになく厳

しい。明るい緑の瞳が燃えるようだつた。

リコリスの周りに、光り輝く妖精たちが立ち、それから彼らを中心とする地面に巨大な魔法陣が描かれた。

白い魔方陣は瓦礫の山と化した広場をぐるりと囲めるほどに広く、絶え間ない輝きが場を満たしていくと、倒れていた人々の傷が癒えていく。

「ポーン、ナイト、町の人を避難させて。ビショップは、他に怪我人がいたら治療を」

よく通る声で指示を出し、リコリスはヒースを隣に立っていた妖精にそつと預けた。

離れがたく思つたが、その場の張り詰めた空気がそれを許さない。その心情を察したのか、妖精が宥めるように背を撫でてきて、それでずつと固くしていいた彼の体から力が抜けた。

身を任せた妖精には体温がないのに、何故か温かかった。

同じように妖精に抱え上げられている父の姿を前方に見て、ヒースの意識はそこですとんと落ちた。

去つていく妖精たちをリコリスは見送った。

間に合つてよかつたと安堵する心を、震えがくるほどの怒りが塗り替えていく。

ライカリスに蹴り飛ばされた男を、リコリスはきつく睨みつけた。

男はまだ地面に倒れていて、その手から離れた大剣の柄には、刃がついていなかつた。

斬りつけられそうだつたヒースを助けた時に、ライカリスが叩き

折ったのだ。根元から折られた刀身は、男から大分離れた場所に突き刺さっている。

いつ目を覚ますか分からない男から、リコリスを庇うように立つライカリス越しに男を見据えると、情報が視界に入ってくる。リードといひ名、9割減つたHPと レベル。

(レベル523?! パートナーネームか、こいつ………)

レベルがここまで上がっているとなると、この男はきっとプレイヤーの誰かのパートナーだったのだ。

プレイヤーの中で見れば中堅だが、戦う術を持たない者やレベルの低いデフォルト状態の者からすると脅威だ。

後衛であるリコリスも、単体で正面からぶつかればどうなるか。ライカリスや、大量に町に放つたりコリスの妖精たちならば、全く問題はないのだが。

「……ん?」

ふと、リコリスは目を細めた。

倒れ伏す男のHPがじわじわと回復している。時間経過による自然回復にしては不自然なそのスピード。

そもそもライカリスに攻撃されてHPが残っているというのがまずおかしい。ライカリスが手加減などするはずもないし。

男には、HPと一緒に8~9割減らされた際にランダムでつくステータス異常『ハックタク気絶』がついていた。

これは効果時間が非常に長く、HPが大きく回復するか、状態解除スキルでないと自然回復を待つのは辛い異常だ。この分ならば、当分起きることはない。

だが、トリコリスは他にかかっている2つを見た。

「『全能力上昇』に『持続回復』 ライカ、多分どこかに神官がいる」

【全能力上昇】は事前にかけておくタイプの補助スキルだが、もう一方の【持続回復】は明らかにライカリスの攻撃を受けてからかけられたものだろう。残り時間を確認して、リコリスはそう判断した。

どこかに男の仲間の神官がいて、こちらを伺っているのだ。

【持続回復】は【単体回復】などの直接的な回復スキルよりも射程が長いので、通常の戦闘以外に、後衛の接近が危険な敵、あるいは様子見などの時にも使用された。

そして【全能力上昇】は高レベルの神官のスキルならば、やはり%でステータスが上昇する。

数値を見るに、相当レベルの高い神官がついている。ライカリスの攻撃を辛うじてとはいえ、耐えたのも納得がいく。

こちらに近づく危険を冒さなければ【持続回復】以外の回復スキルは届かないから、男が即時復活する可能性は低いが。ライカリスが男から目を離さないまま、肩を竦めた。

「ああ、道理で手応えがおかしいと……顔半分、飛ばすつもりだったんですけどね。思つた以上に刃が通りませんでした」

手の中の短剣を弄びながらライカリスがそんなことを言つ。彼は無造作にまだ気絶している男に近づくと、男の顔を踏みつけ、リコリスを振り返つた。

「とりあえずこれは始末してもいいですか？」

「ぐく、とりコリスの心臓が大きく波打つ。

「他にもうひと仲間がいるかもしませんし、数は早めに減らしておきましょう。尋問は神官を捕まえればいい」

至極当然のようにあつさつと言われて、しかしリコリスは咄嗟に答えられなかつた。

ライカリスの意見は尤もだ。

ゲーム中でも、当たり前にたくさんの敵を倒してきた。獣も、人間も。

ゲームならばHPが0になつて消えるだけ。プレイヤーやNPCなら、戦闘不能になつて復活地点に戻されるだけ。

この状況でも、躊躇いなく止めを刺しだろう。

しかし。

(「この場合、どうなるの……？」)

このゲームと現実リアルの混ざり合つた、線引きが曖昧な世界では。人が死んで、しばらくすればまた復活するなどといつことはあり得るか？

彼女を囲む壊れた建物と、残つている血の跡が、耳に残る悲鳴が、その疑問を否定する。

分かつてゐる。迷つてゐる時間はない。迷う必要もない。

家族のような人々を傷つけられたのだ。

許せないと、リコリスの中で声がする。許すものかと思つ。

それでも本当なら、捕らえて罪を償わせるべきだと、そうしたいと、この世界に来る前に培われた理性が心のどこかで叫ぶ。

だが仮に捕らえたとして、もし逃げられたりしたら。むしろ、これだけのレベルならば、その可能性が高い。

そうなつてしまえば、これ以上の惨事になる。

それに。

答えられなければ、それが命を奪うことに対する恐怖だと知られれば、きっと疑われてしまう。

そして最も大切なものを失うだろう。ライカリスとの、関係を。

どちらが恐ろしい？　そんなの、考えるまでもない！

怒りと、理性と、そして大きな恐怖が、リコリスの背中を押した。彼女は目を伏せた。

「そいつの、パートナーに謝らないとね……」

咳きを許可と受け取つて、田で追えない速さで閃いた黒い刃が、男の首を撫でた。

リコリスは最期まで田を覚まさなかつた男のHPが0になるのを確認したが、そこにゲームのよつに『戦闘不能』の状態異常が付くことはなく、しばらくしてその情報も表示されなくなつた。

鮮やかな鮮血を器用に避けて、ライカリスがリコリスのところへ戻つてくる。

平然としている彼は、不思議そうにリコリスを見た。

「どうかしましたか？」

「ん、なんでもない」

……本当に、なんでもないような顔で笑えているだろうか。

指先が冷たい。足が地面についている、その感覚が遠い。

「リコさん？」

ライカリスの手が頬に触れ、心配そうに撫でてくると、リコリスは目を閉じて吐息を零した。

「ぎゃあああああ！　は、放せ！　放してくれっ」

「…」

唐突な叫びと瓦礫の崩れる音が、静寂を壊した。

身構えた2人の視線の先、リコリスの召喚していたローンがローブの男を引き摺っていた。

捻り上げられているらしい腕に力が込められるたび、哀れな悲鳴が上がる。件の神官だった。

ライカリスが笑う。

「さすが。あなたの妖精は優秀ですね」

問えば、他に不審な者は見られなかつたと報告された。
町の人々は酒場に集まっている、とも。

戦闘妖精は声を持たないが、どうやら召喚者は意思の疎通ができる。もしくは妖精師だからか。

「酒場に行こう。ローン、そいつそのまま連れてきて

早口に言つて、リコリスは踵を返した。
むせ返るような血の匂いが淀む広場に背を向けて、早足で歩き出

す。
去り際、視界の端に見た男の死体も大量の血液も、消えることなく残っていた。

第16話 暖暉する心と謎の声

優先すべきを優先しただけ。そこに、良いも悪いもない。守りたいものを守つただけ、トリコリスは自分に言い聞かせていた。

足だけが機械的に動いて、酒場へと向かう。

何かを、誰かを殺すなんて嫌だと思った。恐ろしいと。ただこの世界に来た以上、それは避けて通れないだろうとも覚悟していた。

今思えば、その覚悟のなんと薄っぺらなことか。まさか2日目にして人の死ぬ様を、それも己の判断で見ることになるとは想像もしなかったのだ。

(でも)

それよりも、トリコリスは瞑目する。

人の死に深く関わったことよりも、その光景にあまりショックを受けていない自分が、彼女は信じられなかつた。

首から血を噴き出して倒れる人間、濃い血の匂い、小刻みに痙攣しあがて動かなくなつた身体。

それを目の前にして、トリコリスの頭も心も落ち着いていたのだ。あんな血生臭い光景に慣れるような生活はしていなかつたはずだ。というのに。吐き気も催さず、目を逸らす必要すら感じなかつた。それが何よりショックだつた。

(自分の理由を優先して人を殺した、のに……私は、)

ただ、その理由が守られたことを安堵している。

誰かを殺すなんて嫌？ 恐ろしい？

死を目の前に平然と心落ち着けながら、よくもそんなことを。

リコリスは呆然と、虚ろな目で前を歩くライカリスを見た。
それから妖精と、その腕に掴まれてもがいているロープの男を順に見つめる。

男は名をダックワイードといった。

先ほどリリコリスが【沈黙薬】サイレンスジースをかけたため、魔法の詠唱も、罵倒も、許しを請う声も音になっていない。

レベルは580。死んだ男と同様に、プレイヤーのパートナーだつたのだろう。

リコリスにはそのレベル帯の知り合いがない。

だから死んだ男が誰のパートナーだったのかは分からぬが、もしその誰かがリコリスのようにこの世界にやってきて、あるいは既に来ていたとしても、もう会うこととはできない。
どんな関係だったのだろうか。

パートナーネット的好感度はクエスト、イベント、それからどれだけの時間一緒に行動したか、などが関わってくる。

リコリスとライカリスほどに親密だったということはないはずだが、500を超えるまで育つていたことを考えると、それなりだつたのかも知れない。

先ほど「謝らないと」と言つたが、本当にそのプレイヤーがこの世界に来て、もう自分のパートナーがないことを知り、リコリスの前に現れたら。

先に手を出してきたのは男の方だ。そう理解しても、納得できるだろうか。

(……私だったら……ライカ……)

ならば殺さずに済ませるべきだった？

しかしその選択肢はリコリスにはなかつたのだ。あつたとしても、きつと選ぶことはなかつた。

これは考えるだけ無駄なこと。

あの男はもう死んでしまつたのだから。

己の選んだ行動に実力が伴わず、負けて、死んだ。それだけだ。

……それだけ？

思考が虚しく空転する。

頭が勝手に、何かを考えてはそれを否定し、否定したばかりのそれを今度は肯定するような意味のない行為を繰り返して、そのうちに、リコリスはもう何を考えているのかも分からなくなり、自分が歪んでいるような氣すらしてきた。

足元も覚束なくなつて、石畳の僅かな段差に蹴躡きそうになる。咄嗟に踏み止まろうとして、しかしリコリスは逆に強く地面を蹴つた。

「…………つ、ライカ！」

「え？」

切羽詰つた声に呼び止められ、驚きの表情でライカリスが振り返る。

体半分振り向いたライカリスの首に、リコリスは強くしがみついた。それこそ、体当たりの勢いで。

「わ、つと……リコさんつ？」

何事かと困惑を滲ませながらも、ライカリスは飛びついてきた頬
りない体を受け止める。

「ごめん。5分だけ待つて」

懇願は早口で。

ライカリスがどんな顔をしているのか分からないが、長い腕がリ
コリスの背に回り、大きな手が宥めるように優しく触れた。
妖精とダックウィードの気配がそっと遠ざかる。
ぎゅう、とリコリスは腕に力を込めた。

(何してるんだろ、私)

こんな意味がない行動に走って、これで疑われたらどうする。
そう思つのに、正体の分からぬ衝動がリコリスを動かした。

自分が2つに分かれているようだ、とリコリスは思う。
ライカリスに隠していることを知られ、拒絶されることに、心臓
を突き刺されるような恐怖を感じる心と。

全てを知つて、受け入れてほしい、と。私はここにいるのだと。
泣き叫びたくなるような感情。

相反する意思が、ただライカリスと一緒にいたいという願いの中
で共存している。

強く強く渦を巻く何かに翻弄されて、意思も感情もコントロール
を失つて、リコリスの混乱は加速していく。

バラバラになる。

「う、ライカ、……ライカッ」

「リコさん?」

「何、これっ? 恐い、こわいっ」

「リコ。リコ、どうしたんです。ほら、落ち着いて、大丈夫ですか
ら。……リコ?」

宥める声、背中を撫でる手。

きつと世界で一番安心できる場所について、それでもリコリスの意識は現実との境目を失っていく。

困惑を狼狽に変えた、ライカリスの声も、搖さぶられる感覚も遠く。

ごめんなさい。

声を聞いた。
優しい声だった。

「ごめんなさい。ごめんなさい。怯えないで……あなたは悪くないのよ

声は何度も何度も謝った。
悲しげで、泣きそうで。

悪いのはあなたではないの。あなたは優しいだけ

声はただただ謝罪を繰り返す。

“めんなさい”、“めんなさい”……

「……」

リコリスは薄く目を開けた。
ぼやけた視界に牧場にある自宅の天井と、赤い色が映つて、その
ことに彼女は安堵した。

「リコリスー」

目を開けた途端顔を覗き込んできたライカリスの顔色は悪く、そして田元だけが赤い。泣き腫らした目だ。

どれだけ心配させてしまったのだろう。

覆い被さるようにして抱きついてきた体にリコリスは手を回し、震える背中を撫でた。

「……『めん、ライカ……』

絞り出した声は掠れて、喉に痛みを残した。

リコリスは全部覚えていた。

寝起き特有の倦怠感はあるが、記憶ははつきりしている。頭がパンクしそうな感情の渦に呑まれ、ライカリスにしがみついたまま昏倒したのだ。

ただ、今はあの時の混乱すら冷静に省みられるほど、リコリスの頭は落ち着いていた。

リコリスの中でぶつかり合っていた感情 激情が、今は何事もなかつたかのように……むしろ倒れる前より矛盾なく、ひとつに重なったような。

一眠りしてすつきりした、といつレベルではない。

(もしかして……あの声が何か)

夢と決めてしまつには鮮やかすぎる、あの声。

普通、あの状況でああも意味深に聞こえる声といつのはもっと曖昧で、薄らと覚えているくらいがセオリーだとリコリスは思つていたのだが、全くもつてそのようなことはなく、しっかりと彼女に記憶に残つている。

正体不明であるといひば、見事にお約束なのだが。

リコリスは吐息を零した。

考えても分からないし、仕方がない。

あれだけぐるぐると考え込み、泣き叫びそうなほど取り乱していくおかしな話だが、あの襲撃者よりも、あの声よりも、今は目の前で泣いている男が気にかかる。

嗚咽を堪えているライカリスの髪を、何故か全く力の入らない手でどうにか梳くと、彼女の肩口に伏せられていた顔がゆるゆると上がる。

例によつてぱたぱたと雫が降ってきた。

「ホント、『めんね……なんか、泣かせてばっかり、で』

泣き虫、とからかつたことを、リコリスは後悔している。この男が涙を見せるのは、リコリスの身に何かあった時だけなのだ。

いへり仕返しだったとはいえ、あんまりな仕打ちだった。

「リコ、リコ。よかつた……もひ、田を覚まさないんじやないかと……」「

涙を拭いながら、怖かった、と悲痛な声が告げる。

「…………めん」

「何回呼んでも歸つたままで　　3日も……つ

「み……」

(みつか……3日?ー)

唐突な情報に愕然とする。

(5分待つてとか言つたくせに、3日つ? !)

道理で体が異様に重たいはずだ。

慌てて起き上がるうとするが、そんな体力がなかつた。手や首を少し動かすくらいが限界だ。

それでもリコリスが焦つたように身じろぐと、ライカリスは彼女を抱く腕に力を込めた。

「い、いけません、そんな急に動いたら」

「だつて」

気になることが多すぎる。

真っ青な顔のライカリスはもちろん、町の人々のこと、捕らえた男のこと、牧場のこと。

少し眠つただけだと思っていた。

それなのに、どうして、3日も。

「町の人は皆さん無事です。あなたが倒れた後も妖精たちは消えませんでしたから、怪我人も全員治療されましたし、今も町を守ってくれています」

皆、無事。その言葉に、リコリスはひとまず安堵して動きを止めた。

「牧場も、家妖精とチエスナットさんたちが見てくれていたので、変わりありません。それに、ほら。私が壊してしまった扉ですが……あれも直してもうえましたよ」

見えますか、トリコリスの首の下に手が差し込まれ、それを助けに体が少しだけ起こされる。

頭をライカリスの胸に半ば預けるようにして見た家の出入口には、言葉の通り真新しい扉が納まっていた。

「あ、ホントだ」

「サイプレスさんが来てくれたんです。それと、姉さん夫妻も。皆リコさんを心配していました」

「後でお礼に行ないとね。……あと、謝らないと」

再び枕に頭を沈めて、リコリスは嘆息した。

あの大変な時に、役に立たなかつたどころか、倒れて迷惑をかけてしまつた。

「あなたには何も非はない。あなたの妖精がいなければ、死者が出ていたかもしれないんです」

「でも」

「氣負いすぎです。責任を負うような立場でもないでしょう。そもそも謝るべきはあなたではないんですから」

諭す声に苦々しさが混ざる。

「あの神官は^{ブリースト}」

「……捕らえてありますよ。【沈黙薬】の効果が切れず何も聞けていないので、とりあえず町外れの小屋に転がしてあります。妖精が見てくれています」

一気に室内の温度が下がつた気がして、リコリスは微かに体を震わせた。

ライカリスの顔を直視する勇気がない。

それをどう捉えたのか、ライカリスが更に不機嫌な、というより怨念の固まりかというような空気を纏つて、リコリスを見下ろした。

「正直あんな輩、今すぐでも始末してやりたいです。けどね、」

吐き捨てるように、憑々しげに呟つ。

「でも、リコさんの様子がおかしくなったのが、最初にあの男を殺してからなので……もしそれが倒れた原因なら、その仲間も安易に殺してはいけない気がして」

眉根を寄せ、問いかける視線を向けられて、リコ里斯は少し考えた。

ライカリスが疑問に思うのも無理はない。

散々敵を殺してきたゲームの、その延長らしいこの世界。殺人が恐ろしいなどという理由は今更すぎて、ずっと行動を共にしてきたライカリスは思い至らないのだ。

それはリコ里斯にとっては幸いだったが、それ故に生まれる疑惑には答えなければいけないだろう。

「……あの時、あの男のパートナーに謝らないと、って言ったよね、私」

「ええ」

「あの男も、仲間の神官もね、一緒に行動してた仲間がいたんだよ。多分2年前まで」

「牧場主さんのことですよね、あなたと同じ。パートナーの有無は私には分かりませんでしたが、まさか謝るつて その方、リコさんのお知り合いでしたか」

「いや全然。あの2人のことも知らないし」

『アクティブファーム』ではNPCが多くて、リコ里斯でも全ては把握しきれていなかった。プレイヤーも当然そうだ。

まさか殺した相手がリコリスとなんらかの繋がりがあったのかと不安そうな顔をしたライカリスに、そうではないと首を振る。

「そういうじやなくて。この先その人がこの世界に戻つてたら、もしかしてもう戻つてきてたら、つむづくと考へたの」

それ以外にも色々とあつたが、それは言えないので省略する。

「パートナーってことはさ、私とライカみたいな関係でしょ？」
同じではないだらうけど。もし、戻つてきてそういう人が殺されたら」

「考えすぎです」

すぱつと、ひどく呆れた声とため息に、リコリスは言いかけた言葉を遮られた。

幾分空氣を和らげたライカリスが、リコリスの前髪を搔き上げる。

「まあ、言いたいことは理解できますが。無意味ですよ、そういう仮定の話は。そんなことを考へて倒れたんですか？」
「だつて。私はライカがすごく大事だし、その」
「だから考えすぎですって」

「う、そうだよね。考えすぎで、いつの間にか頭の中ぐるぐるなつちやつたよ」

リコリスの前髪を指先で弄ぶライカリスは、既に先ほど尖った気配を完全に引っ込めて、苦笑することしきりだった。

まだ涙の気配が色濃く残る瞳が、微笑みながらも、切なそうに細められる。

「心配してくれるのは嬉しいですが、私は一応弱い方ではないです

し、簡単に死んだりしませんから。むしろリコさんの方が心配ですよ？……本当に、心臓が止まるかと思いました」

よ? 本当に、心臓が止まるかと思いました

「アーネスト...」

「いつだってあなたの隣にいますから、だからもつと頼つてください。せめて、あんな状態になる前に。馬鹿なことを考えていたら、ちゃんと止めてあげます」

「……頬もしいなあ」

でもわへ、あんな風にゆるいさせりとな。

あの混乱は、もうリゴリスの中に残っていない。今はもう不自然なほどに自然に、あの出来事を、死を、受け入れられる気がした。プレイヤーとパートナーのことを考えるとまだ若干凹みそうになるが、優しく髪を撫でる大きな手が、その不安を抑えてくれる。ほう、トリコリスは目を閉じて、その感触だけに集中しようとし

？」

とても聞き覚えのある声が、部屋に飛び込んできて、リコワスは見開いた。

目を見開いた。

それは以前お仕置きした時よりもけたたましい悲鳴だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3811z/>

ヴェルデドラードで牧場生活を

2012年1月5日20時13分発行